

元柱で現上弦な鬼殺隊士のお話

揚げ物・鉄火

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人を食わず人を守る上弦の鬼がいるらしい…

その鬼は鬼殺隊の元柱だったとか…

そんな中、新しい隊士が入って来た…

その隊士はかつての柱に瓜二つだった…

どうもお久しぶりです。

揚げ物・鉄火です。

性懲りもなく新しい小説を書いちゃいました…

恐らくエタります。

もし続けば無惨様がハゲます。

目次

第十一話	76
第十話	69
第九話	61
第八話	55
第七話	47
第六話	39
第五話	32
第四話	23
第三話	15
第二話	7
第一話	1

第一話

鬼

それは、鬼無辻無慘を祖とする人食いの化け物であり太陽の光にその身を焼かれるか特殊な刀日輪刀で頸を刎ねない限り死なない上に人を遥かに凌駕する身体能力を持った存在。

そんな鬼を滅ぼす為に設立された政府非公認の組織が存在する。

その組織の名は、鬼殺隊。

大半が鬼に大切な人を奪われた者達で作られた組織。

鬼殺隊に所属する者の大半は『全集中の呼吸』と呼ばれる特殊な呼吸法で鬼と同等の身体能力を得て特殊な鉋物から作られた日輪刀と呼ばれる刀で鬼の頸を斬るが中には、全集中の呼吸を扱えない者たちも存在する。

そういう者達は、隠と呼ばれる後処理や隊士達をサポートする存在になる。

だが隊士達も時に実力以上の鬼に出会い返り討ちにされ殉職する者も後を絶たない。

そんな鬼殺隊の中で最強の称号を得た者達を柱と呼ぶ。

柱の実力は、鬼無辻無慘の直属の鬼の組織十二鬼月の下弦の鬼であれば単体でも撃破可能な実力を誇っている。

だがそんな柱であっても単体では討伐不可能とされている鬼達がいる。

それは、上弦の鬼と呼ばれる存在。

ここ百年近く顔触れが変わらなかつた存在で何人もの歴代の柱達を葬ってきた鬼達である。

そんな彼らを討伐したという知らせは十数年前に一度だけである。

そんな上弦の鬼と二人の女性が向かい合っていた。

「やあやあ、今夜は月が綺麗だねえ」

軽い口調で言葉を発したのは、頭から血を被ったような髪色に西洋の服を着た上弦の式『童磨』であった。

「カナエちゃん…逃げて」

「ごめんなさい…でもそれは出来ないわ」

それに対して返事を返さず二人で言葉を交わしたのは、蝶のような髪飾りで美しい黒髪を二つに纏めて蝶のような羽織を羽織った美女『花柱』胡蝶カナエ。

その隣に立つのは、翼のような髪飾りで若干青みがかった黒髪を首に辺りで結び絵羽模様の羽織を羽織った『花柱』に引けを取らない美しい大人の女性『天柱』天空時 輪であった。

本来胡蝶カナエが一人でこの地域を見回る予定だったが『天柱』の嫌な予感がする！」の一言で一緒に見回る事となった。

その結果、本来の歴史とは違い上弦の式の童磨を相手に二人の柱で迎え撃つ事が出来た。が、いざ上弦の式を前にすると初めてその実力差を理解できた。

「あれ？どつちも挨拶してくれないの？ちよつと悲しくなっちゃうな」

一向に返事を返さず二人だけで話す鬼殺隊員に童磨は再び声を掛けた。

「カナエちゃん…あなたにはしのぶちゃんやカナヲちゃん蝶屋敷の子供たちのようにあなたの帰りを待つ人がいるでしょう？だからあなただけでも逃げなさい」

「で、出来ません！私も鬼殺隊の柱です！鬼を前にして敵前逃亡なんて出来ません！」

天柱は花柱を逃がそうとしているが当の本人は、断固とした意志で自分も戦うと言って聞かない。

その様子を見て童磨は、面白そうに見るだけに留めた。

そして何を言っても説得できない胡蝶カナエについて痺れを切らした天空時は、強硬手段に打って出る。

「はあ…わかったわカナエちゃん…」

「輪さん！やっとわかってくれた「少し眠っててね」え？」

ドムッ！

「ゴフッ…！」

「ごめんなさい…でもこれは貴女のためよ」

天空時は、胡蝶カナエの腹部を殴り気絶させてから近くに待機していた隠にカナエを預けた。

「彼女のこと頼んだわよ」

「お任せ下さい天柱様！」

天空時の言葉に隠の人は領き風のように去って行った。

「さて…お待ち頂き感謝いたします。上弦の弐 童磨さん」

「あつ、やっと返事してくれたね！じゃあ改めて自己紹介させて貰うよ。俺は、十二鬼月上弦の弐 名を童磨と言う…なんてね！合ってる？名乗りとして合ってる？黒死牟殿の名乗り方を参考に見てみただけど合ってるかな？」

童磨が名乗り終えると急に子供のようにはつちやけた様子で聞く。

それに対して天空時は、まるで子供に言い聞かせる母のような慈愛の籠った声で返した。

「ええ、合ってますよ。では、私の番ですね？…私は、鬼殺隊天柱 天空時 輪と申します。冥途の土産にでも覚えておきなさい」

「うわー、かっこいいな！じゃあ突然で悪いけど…今から君を救済するね？」

「冗談は、ほどほどにお願いします…いざ参る！」

童磨の言葉に天空時が日輪刀を構え童磨も二つの扇を懐から取り出し血気術を使う準備をする。

「血気術…蓮葉氷！」

「天の呼吸 壺ノ型…天輪！」

鬼殺隊最高戦力の柱と十二鬼月上弦の弐が本気の殺し合いを始めた。

蝶屋敷

ここは、鬼殺隊の隊士達が鬼との戦闘で傷を負った時に運ばれる診療所のような場所。この屋敷の主は、花柱胡蝶カナエと実の妹であり継子の 胡蝶しのぶである。

本来この屋敷は、あまり騒がしくないのだが今は違う。

その理由は、昨晚隠の手によって連れ込まれた花柱胡蝶カナエが一向に目を覚まさないのである。

「葵とカナヲは替えのタオルと毛布を持ってきて！あなた達は、私の部屋にある痛み止めの薬を持ってきて！」

「……はい……」

しのぶの言葉に蝶屋敷のメンバーが返事を返す。

「姉さん……絶対助けるから、目を覚まして……姉さん」

しのぶは消え入りそうな声で姉の手を握りながら呟いた。

「う……う……し、しのぶ？」

「姉さん！目を覚ましたのね!!」

だが突如カナエが目を覚まし一気に起き上がった。

「そうだ！輪さんは!? うっ、うう！」

「姉さん!? まだ寝てなきやだめよ！内臓にすごい衝撃を食らったかのように内臓が傷ついているから！」

「だ、駄目よ！早く輪さんを助けに行かなきゃ……一人で上弦の鬼と戦いに残ったんだから！」

「上弦と一人で!？」

カナエは、妹の言葉を見殺ししてすぐに向かおうとしたが痛みのあまり地面に蹲る。

そんな時だった。

『カアカア——！伝令伝令！訃報訃報！天柱 天空時輪！上弦の鬼ト

ノ戦鬪デ死亡！上弦の弐ト相打ちデ死亡！繰り返ス！天柱 天空時
輪！上弦の鬼トノ戦鬪デ死亡！上弦の弐ト相打ちデ死亡！」

何処からともなく飛んできた鎧烏の報告により天空時の死亡が決
定づけられた。

「あ、ああ…ああああああ!!」

鎧烏の報告を聞いてしまったカナエは膝から崩れ落ち絶望の慟哭
を上げた。

「姉さん!?姉さんどうしたの!?!しっかりして姉さん！」

「私の…私のせいだ…」

「え?」

「私が弱いから…私が足手まといだから…だから輪さんは、死んでし
まったんだ…私のせいだ…」

「姉さん!?!姉さん!?!姉さん!!」

カナエは自分が弱かったと責めて気を失った。

無限城にて

無限城

それは、鬼の首魁である鬼無辻無惨の本拠地であり十二鬼月を招集
する時に使う場所である。

だが今この無限城に居るのは鬼無辻無惨本人と上弦の弐 童磨と
の戦いで死んだはずのの天空時 輪（瀕死状態）である。

「貴様か…半天狗だけでは飽き足らず童磨まで殺した鬼殺隊の柱とい
うのは?」

「ヒュウ…コヒュウ…コフツ！」

無惨が青筋を浮かべながらした質問に対して天空時は、何も答える
事が出来なかった。

「もういいー何もしゃべるな！貴様を見ているだけで虫唾が走る！貴
様は早々に殺してやる！…と言いたるところだが貴様のせいで上弦
に空気が出来た。その責任はとって貰うぞ」

無惨は、そう言うのと天空時の傷口に自分の血を流し入れ始めた。

「ガッ！ガアアア！あ、ああああ!!」

血を入れられた天空時は苦しみながら鬼無辻を睨みつけ言い放った。

「き、鬼無辻無惨！貴方、後悔するわよ！私を鬼にしたことを…あなたは、きつと後悔するわ！」

「黙れ！」

「ガハッ！」

その言葉に激昂した無惨は、天空時を蹴り飛ばし気絶させた。

「私が後悔するだど？ふざけるなよ小娘…後悔するのは貴様だ！貴様が鬼になった暁には鬼狩りの柱共を襲わせてやる。その時奴らがどのような顔を浮かべるか非常に楽しみだ」

無惨はそれだけ言い残し無限城を後にした。

残された天空時の目には、上弦 弐の文字が刻まれていた。

第二話

討伐すべき憎き鬼の首魁を前に何も出来ずに蹲るはおろか拳句の果てに鬼無辻の血を大量に注入され鬼に変貌させられていく。

体が鬼の者に変わっていくのを感じ鬼化に抗おうにも抵抗できずにいる自分の弱さに齒噛みしていると急に瞼が重くなって私は深い深い眠りについた。

(あれ?ここは…)

目が覚めると昔自分と弟が一緒に修行していた土地に立っていた。

(なんでここに?いやそれよりも…どうして今になってここへ?だつて此処って…)

「輪姉ちゃん!」

(連!?なんで貴方が…死んだはずじゃ!?)

声が聞こえた方を振り向くと死んだはずの弟が胸に飛び込んで来た。

「あ、そうだ!あのね、爺ちゃんから姉ちゃんに伝えたい事と伝言が一つずつあるんだって!」

(伝言!?あのお師匠様から?)

私が困惑していると景色が急に切り替わりいつも訓練場に使用していた床の間に居た。

(また!?)

「輪…聞いておるか?」

(お師匠様!なんで生きてるんですか!?)

「ふむ…不思議な事を言うな。勝手に殺すでない儂はまだこの通りピンピンしておるわ!わっはっは!」

(い、いえ!そう言う事ではありません。あり得ないですよ…だつて貴方は、上弦の鬼に…殺されたんですから)

「まあそれは良しとして…輪、儂はお前を『天の呼吸』の正式な継承者に任命する!」

「よかったですね姉上!」

(あれ…？もしかしてこれって？過去の記憶？なぜ今さら？)

過去の記憶だと言う事に気づいたがなぜ今になって記憶が蘇っているのか分からない。

だけど私の疑問を気にせずお師匠様が話を続ける。

「それと伝言というのか？それよりかは頼みの類じやな…輪、例え鬼の首魁である鬼無辻の血を入れられ鬼化してしまった場合は決して人を食うな！人を守れ！それが儂のお主へ出来る最後の頼みじゃ」

(……………わかりましたお師匠様)

「お爺ちゃんという事なの？」

お師匠様の言葉に頷くとまた景色が切り替わった。

(また!?今度は何時の…？……………ああ…そんな)

切り替わった瞬間目に飛び込んで来たのは私の人生最悪の日の景色…私が鬼殺隊に入ることを決意した日の景色。

「輪！連！早く逃げろ！」

「お爺ちゃん！」

「よそ見とはずいぶん余裕だな！天空時 龍之介！」

「じやかあしい！とつととくたばれ上弦の参！」

お師匠様と上弦の参が戦っていた。

「姉ちゃん！早く逃げよ！」

(連!?私はいいいからあなただけでも！)

ドッ！

「ガフツ！姉…ちゃん…」

お師匠様と戦っていた上弦の参の攻撃が最愛の弟の胸を貫通した。

(ああ…ごめんね…連。不出来なお姉ちゃんでごめんね…あなたを守れなくてごめんね…)

「貴様ー！天の呼吸 漆ノ型 毘沙門天 ！」

「良いぞ良いぞ!!滅式…絶技！」

その光景に怒りが頂点に達したお師匠様が天の呼吸の中で最高威力の突き技を放つ型を放ちそれに対し上弦の参も自分の持つ技で迎え撃った。

その瞬間、私の目の前が真っ白になった。

(ああ…お爺様…あなたとの約束を…連の仇を…必ず…)

「…き…ね」

「起き…りん…」

「起きろ…ね」

「とつと起きろ輪廻！」

ビクウ！

突如聞こえて来た大声に一気に意識が覚醒する。

(なにになに?!なにがどうなったの!?)

周りを見渡しているとなぜか女性物の着物姿の鬼無辻わかめ頭が居た。

「なにやってんの?」

思わず素の声で聞いた。

「貴様も鬼の肉体に変化したようだな…今からお前の名前は輪廻だ。せいぜい上弦の弐として恥じない行動を取れ。わかったら早く行け、貴様を見ていると虫唾が走る！」

「あ、はい」

ベン！

鬼無辻の言葉に反射的に返事をするどころから琵琶の音が響き障子の扉が現れて何処かの森の中に落とされた。

「うくん…どうしましょうか?」

(このまま鬼殺隊の本部に戻っても即討伐対象になるだけ…色々と考えないといけませんね)

今はそれよりも…

「お腹が空きました…」グウウ…

「何か食べる物を探さないと…」

食べ物を探しに森の中を歩き始めた。

2時間後

「何もない！」

動物一匹見つからなかった。

(なんでこういう時に限って探し物が見つからないのだろうか？食べ物よりも古い日輪刀しか見つからないし…)

「はあ…」

自分の運の無さに軽く絶望していると後ろの茂みからなが出て来た。

ガサガサ

「あー？なんか美味そうな匂いがすると思ったら女じゃねえかよ。今日はずいてんな！」

茂みから出て来たのは鬼。

それも片方の目だけに文字が刻まれた十二鬼月下弦の鬼だ。

「うん？何の用ですか？」

「なっ、ああ…じ、上弦…弑!?!」

私の目を見たのかその鬼は震え出した。

「な、なぜ上弦が!?!それよりも何の用だ！まさか俺を抹殺しに来たのか!?!」

「何を言ってるんですか？」

「あくまでもしらばつくれるつもりか！ならば死ね！」

「天の呼吸 参ノ型 伊邪那美^{イザナミ}」

「あ、熱い!?!ぐぎやああ!!」

急に検討違いな事を言い出し襲って来たので発火する斬撃の参ノ型で軽く返り討ちにした。

「はあ…疲れました」

「おや、あれは？」

また食べ物を探しに歩こうとしたら木々の隙間から蝶の様な髪飾りと蝶の羽織を羽織った女性と二人の女性鬼殺隊士が見えた。

「カナエちゃんと…誰かな？」

後ろ姿しか見えなかったので取り敢えず静かに近づいた。

パキッ

(あ…小枝踏んじやった)

「誰!!」

『天柱』天空時 輪の訃報は知らされた日から『花柱』胡蝶カナエは明らかに弱っていた。

訃報が届いた日から碌に食事を取らず寝る時間もすべて自主稽古に当てていた。

妹のしのぶに心配されてやめるよう言われても「私があの人輪さんの代わりにならなきゃいけないから…」と言うだけで聞く耳を持たない。

しのぶや蝶屋敷の面々が心配し始めたころにお館様から『ここから西の山で下弦の鬼の目撃情報があったから柱を向かわせたいけど皆別の所に行ってるから代わりに行ってくれるかな?』の一言でカナエが向かうことになった。

だが弱り切ったカナエだけでは心配なのでしのぶと半年前に水柱に就任した鱗滝 錆兎とその継子の富岡 義勇。あと何故か分からないが真菰もついて来た。

この豪華メンバーが山に着いた瞬間、下弦の鬼の血気術で男女別々に分断され今に至る。

パキッ

「誰!!」

森の中から聞こえて来た音にカナエ、しのぶ、真菰が日輪刀を抜き構える。

「……」

「……」

「……」

ガサガサ

「「っー」「」ビクウー!

再び聞こえて来た音により一層強く刀を構える。

ちなみに真菰の日輪刀は赫刀に変わっていた(無意識下での万力の握力)。

「肆の型 伊邪那岐」

だが勢いよく飛び出した影に誰も反応出来ずカナエが連れ去られ

た。

「姉さん！」

「カナエさん！」

二人が振り向いた時には既にカナエの姿も飛び出した何者かの姿も無かった。

「真菰！」

「はい！」

二人は影の後を追いカナエを探しに行った。

一方連れ去られたカナエは肩に担がれたまま一切抵抗せずに身を委ねていた。

（あー…私はここで死ぬかな？）

さつきこの鬼の目の上弦の文字が見えた気がした。

（ごめんねしのぶ…お姉ちゃんはここで死んじゃうよ。でも貴女は幸せに生きなさい…私にはもうその資格がないから。私を必死に逃がそうとした輪さんの言葉を無視した私が輪さんを殺したようなものだから…今から輪さんに会って来るね…）

カナエは、すでに全てを諦めて鬼に食われる覚悟をしていた。

だがその覚悟は、最悪の意味で裏切られた。

「ふう…」

「え？」

「カナエちゃんもしかして痩せた？」

「あ、ああ…そんな…なんであなたが…輪さん！」

カナエを連れ去ったのが鬼へと変貌したかつての恩人だと気づいたカナエは胸が押しつぶされる感覚を感じた。

「なんであなたが…！どうして…どうして鬼になってるんですか!？」

「鬼無辻の血を入れられたからだけど？」

カナエの質問にさも当たり前前のように答えた。

それに対してカナエは胸の内を全て吐き出した。

「ならどうして私を食べないんですか!?!私は貴女の忠告を無視して上

弦と戦おうとしたんですよ！貴女は私を守るために死んだんですよ！つまりは貴女を殺したのも同然ですよ！なんで私を食べようとしな
いんですか!？」

「カナエ…」

「輪さん！私を食べてください！それしか貴女の死に報いる方法が思
いつかないんですよ！あなたを殺した上弦の式はすでに死んでるし
！鬼無辻は見つからない！貴女の継子や親族の方達に謝罪したいけ
ど一人もいない！」

「カナエちゃん…」

「輪さん…お願いですから…私を…私を…それしか私には…う、うわ
あああん…!」

泣きながら自分の胸の内を全て吐き出したカナエに対して天空時
は…

「そうだったの…辛かったんだねカナエちゃん」

ただそつと抱きしめた。

「カナエちゃん…もう大丈夫よ。あなたは何も悪くないわ。私は鬼殺
隊の柱として己の責務を全うしただけ、あなたが責任を感じる必要は
何もないわよ」

「でも…輪さんは鬼に！」

輪の言葉にカナエはまだ何か言おうとしていたが次の言葉に阻ま
れた。

「うん、上弦の式を倒した後で無惨に連れ去られて私が後釜に選ばれ
るとは思いませんでしたけどね？でも大丈夫だよ！カナエちゃんが
心配しなくてもいい事よ」

「え？…なんで…ですか？」

「それはまたいつか話すよ。貴女は、しのぶちゃんと一緒に幸せにな
りなさい…それじゃおやすみ」トン

輪はカナエの質問に答えずにカナエの額を軽く突付き眠らせた。

「あ、輪…さん」

カナエはまたも反応出来ず簡単に寝かされてしまった。

「よし…置いて来よう…」

眠ったカナエを持ち上げて探しているであろうしのぶと真菰の所に連れて行く事にした。

「スウスウ……」

「可愛いなあ……うん？なんか変だな？まあいいや」

その後、眠っていたカナエを見つけたしのぶと真菰は本気で心配したが何か吹っ切れたような顔をしたカナエを見て少し不思議に思ったが真菰の「うれしそうならいいんじゃないかな？」の一言で解決された。

「さすまこー！」

ちなみに下弦の鬼は見つからなかったがそれに近い鬼は錆鬼の手で一瞬で倒された。

一人残された天空時と言うと

「お腹空いたら動物か自分の腕を食べて……最悪の場合は、鬼を食べるしかないかな？今はそれよりも……眠い」ドサッ

「スウスウ……」

深い眠りについた。

第三話

「う、うくん…どのくらいの時間が経ったのかな？」

鬼と化した天空時 輪：改め『輪廻』は本来鬼が必要としない睡眠から目を覚まし辺りを見渡す。

「夜か…丸一日寝ていたのか？それともそれ以上かな？」

外の様子を見に洞窟から出ると満天の星空と綺麗に輝く満月を確認する。

「綺麗な夜ねえ…月を見ながら月見酒してみたかったなあ」

「はあ…出来れば行冥君や天元君と一杯飲み交わしたかったなあ…クソツ！無惨め…次あったらその昆布みたいな髪を切り刻んでやる！」

無惨への怒りを確認しながら今後どう行動するかを考える。

「うくん、出来れば誰か私の言葉を聞き入れてくれる人に会って匿って貰うか直接お館様の元に向かうかしたくないんだけど…実弥君とか絶対殺しに来るだろうなあ。杏寿郎君は…殺しに来るね。その継子の娘はまだ分からないかな？行冥君は殺しに来るだろうし、天元君の方は派手派手言いながら刀振り回して来るし…聞き入れてくれるとすれば錆兎君とカナエちゃんくらいかな？他の鬼殺隊士は論外だし…あれ？もしかして詰んだ？」

考察を終えると自分が置かれている状況に気づき血の気が引いていくのを感じた。

「ああ、やばいね！どうしようかな!?このままじゃ死んじやうじゃん!?どうしようどうしよう!!誰か助けてえ！誰か誰かあ!？」

ゴキッ！

「痛っ！ありやー!」

走り回っているとうっかり足を挫き山から転げ落ちる。

「あゝれ〜」

ゴッ！ガッ！ドガッ！バキッ！ゴキン！

転げ落ちながら全身の骨を折ってはすぐに上弦の回復力ですぐに

再生するを繰り返しやつと山道に出れた。

ズザーッ!

「痛い…あれ?」

止まった場所で顔を上げると女性の鬼殺隊士3人と赤い着物を着こなした白髪の鬼…十二鬼月下弦の肆が向かい合った状態でこちらを見ていた。

「…お邪魔しましたか?」

軽く声を掛けると女性隊士達が一気に顔を引き曇らせた。

「十二鬼月…上弦の鬼!?!」

「な、なぜこんな所に上弦が!?!」

「ふ、二人とも逃げて!私が時間を稼ぐ!」ガタガタ

「こ、こいつらは…」

「ん?」

「こいつらは私の獲物だ!貴女に奪わせな…い…です。ごめんなさい」

そして一方の下弦零余子の鬼は、何故か私を見てビビり散らしていた。

「別にこの子達を殺そうとなんか思っていないし、あなたから奪う気もないわ。けどね…今助けられるこの子達の命を見捨てる気も無い!」

「クッ!私より上位の鬼の癖に!鬼狩りに肩入れする気か!?!」

「その通り!」

天の呼吸 弐の型 神隠し

「なっ!消え…」

ザン…

下弦の肆が怒りながら仕掛けた攻撃を見切り特殊な足捌きで相手の意識から自分の存在を消し後ろに回ってから頸を斬り落とす。

「え…?」

「おやすみなさい…」

頸を斬り落とされた事を認識した下弦の鬼は腕の中で崩れて無くなった。

「あ、貴女は…」

「ん？なに？」

「貴女は何者なんですか！」

後ろを振り向くと三人の女性隊士が日輪刀を構えた状態で震えながら立っていた。

「はてさて、何者なのかな？鬼狩りの味方をする鬼のかもしれないし、そうじゃないかもしれない。ただの気紛れで君達を助けただけかもしれないし、違うかもしれない。私が何者かは君達の考え次第だよ？」

「では、失礼！」

言うだけ言って森の中へ走って逃げた。

「はあ…何か食べれる物が欲しい…」

相変わらず何もない。

野兎や猪一匹見つけれない。

見つけた者と言えれば少し前に討伐した鬼が一匹と女性隊士を助けるため討伐した下弦の鬼。

後は少し前にこの山に来た天狗の仮面を被ったご老人。

他には何も見つからなかった。

「明日になったら町に降りて何か食べれる物を買おう…はっ！」

町に降りる計画を練っている間にある重要な事に気づいた。

「太陽はどうしよう？」

そもそも今の私の体は鬼の肉体になっている。太陽の下を歩く事が出来ないのも町に行く事はおろか昼間で歩く事が出来ない。

「どうしよう？…どうしよう？」

どうするか悩みながら色々と考え始める。

「町に降りたら…煎餅にお餅。お団子やおはぎ。白いご飯にお茶漬けとサンマの塩焼きに漬物が食べられる…ゴクリ」

自分の好物やその他の美味しい食べ物想像して生唾を飲み込む。

「何としても食べたい…絶対に！」

それからの行動は早かった。

昔ある鬼との交戦中に血気術がどの様に生み出されるかを教えられた。

血気術は鬼が生前…人間だった頃の記憶を元に生み出されるらしい。

あとは、その者の深い欲求からも誕生する事があるらしい。

「私が望むのは…太陽の下を自由に歩き回れる力。もう一度みんなと一緒に過ごせる力」

両手を合わせ座禅を組み精神を統一させる。

そうしていると頭の奥から四文字の漢字が浮かび上がって来る。

「私の血気術…鬼の身でありながら人に化ける力」

『血気術——表裏反転！』

血気術を使うと同時に私は気を失った。



チュンチュン！

チュンチュン！

「…ん？」

鳥の囀りが聞こえ目を開けると洞窟の入り口から太陽の光が差していた。

「あれ？もう朝？」

グググ…

鉛のように重い体を持ち上げる。

「なんで寝てたんだっけ…？」

壁に手を当てながら立ち上がり昨晚の事を思い出す。

「あ、そうか…血気術を使ったら眠くなっただっけ。成功したかな？」

恐る恐る自分の右手に太陽の光を当てると…

「あれ？燃えない…成功した？」

腕が燃えず日の光を浴びるだけだった。

「イヤッホー！成功したのね！これでやっとお煎餅を食べに行けるわ！最近任務続きで蜜離ちゃんや杏寿郎くん達と一緒にご飯を食べに

行けなかったから久しぶりにお茶漬けとか食べたいわあ！ハッ！」

喜びも束の間あるとても重要な事に気づいた。

「お…お金どうしよう？確か万が一のために隊服の両袖の内側に一円札を隠しておいたはずだけど…あるかな？」

そう呟きながら袖の中身を確認すると一円札が三枚出て来た。

「よし…まずは、何から食べようかなあ？」

今日のご飯を何にするか考えながら山を下りる。

途中で猪頭の珍獣が勝負を挑んで来たが無視した。

◆ 数日後

「いらつしやい！」

「親父、鮭大根定食を二つ頼む」

「おい義勇。俺は鮭大根を食べたいなんて一言も言っていないぞ？」

「鯖兎は、いらないのか？」

「ちゃんと食べるさ」

町の定食屋に入って来たのは、鬼殺隊 水柱 鱗滝鯖兎とその継子

富岡義勇の二人であった。

二人が席に着いて注文が来るのを待つ間に義勇から話を切り出した。

「鯖兎…輪さんは、無事だろうか？」

「義勇？」

「輪さんは、入隊したばかりの俺を沢山世話してくれた…塞ぎ込んでいた俺を外に連れ出して鮭大根が美味しい店やお菓子の美味しい店をいっぱい紹介してくれた」

「義勇…」

「それだけじゃない…自分に自信を持てなかった俺を励ましてくれた。俺に稽古を付けてくれた…お館様は、輪さんは鬼殺隊創設以来最強の柱と言っていた。そんな人がそう簡単に死ぬとはとても思えないー！」

「義勇！」

現実逃避を始めようとした義勇に鯖兎は強めに声を掛けてから一

度口を閉じ再び口を開く。

「輪さんは死んだ…上弦の鬼を相手に相打ちに持ち込んで死んだ。これは変えようのない事実だ。けどあの人のおかげで何人もの罪の無い人の命が救われる…あの人の…輪さんの死を無駄にしてはいけない。男なら！いや男じゃなくても鬼殺隊士なら前を向いて歩かなければいけない…だから俺達には立ち止まっている暇なんて無い！一刻も早く鬼無辻を見つけ出しその頸を斬らなくていけない！」

「錆兎…机に乗るのはどうかと思うぞ？」

「うつ…」

熱くなり過ぎた錆兎は、自分のやってる事を認識し机から降り再び座る。

「お待たせしました。鮭大根定食になります。ごゆっくりどうぞ」

「え？」

鮭大根定食を運んで来た店員の声を聞いた二人は思わずそちらを振り向き固まった。

「いかなさいましたか？」

急に見られた事に疑問を感じた店員は首を傾げながら質問した。

鮭大根定食を運んで来た店員は二人が話していた鬼殺隊 天柱 天空時輪と声、顔立ちが瓜二つだったのだ。

「輪…さん？」

「輪さん…なのか？」

「いいえ、私は輪廻と申します。では、失礼致します」

二人の疑問に答えた店員…輪廻は一例して厨房へ戻った。

「輪ちゃん、誰だいいの二人は？もしかして恋人かい？」

「うちの看板娘は誰にもやらんぞ！」

「違いますよ女将さん。誰かと間違えただけのようです。あと店主も恥ずかしい事言わないで下さい」

「サバの味噌煮定食出来たよ！運んでおくれ！」

「あ、はい！」

厨房から賑やかな声が聞こえながら時間は進む。

一方の錆兎と義勇は、と言うと

「……」もぐもぐ

「……」パーッ!

錆兎は黙々と鮭大根を食べ続け義勇は謎の発光をしながら嬉しそうに食べていた。

「なあ、義勇」

「うん?」モグモグ

「あの店員……輪さんだと思うか?」

モグモグ……ゴツクン!

錆兎の質問に義勇は口に中の鮭大根を一度飲み込んでから口を開く。

「輪さんは死んだと錆兎が言ったんだろ? なら違うんじゃないのか?」

「いや、そうなんだが……あの時から輪さんと同じ臭いを感じたんだ……(あと僅かに鬼の臭いもしたが) 義勇は覚えてるか?」

「(俺よりも何倍も優秀な錆兎に分からない事は俺なんかに分かるはずがない……そもそも輪さんの臭いなんてあまり覚えてないし。覚えてるとすれば入隊したばかりの俺に稽古を付けてくれた日の夜に同じ布団で抱き枕にされて寝たことくらいだから輪さんの臭いなんてあまり) 覚えてない」

「何か重要な事を省いたように感じたが何か隠してるのか?」

「特に何も隠していない(そもそも『これは二人だけの秘密にしておいて下さい!』と頭を下げて頼まれたからな。いくら錆兎と言えどこれは言えない)」

「……そうか。取り敢えずお館様に報告しないとな」

義勇が食事を終えるまで待ち支払いを終えた錆兎は、鬼殺隊本部のお館様の所に向かった。



「ふう……危なかった~! まさかお世話になってる定食屋に錆兎くと義勇くんが来るなんて思いもしなかったよ……」

山を下りた輪廻は、偶然立ち寄ったこの定食屋の店主と意気投合し食事代無料＋寝床の提供との引き換えにこの定食屋の看板娘になったのだ。

その結果、店の売上げが3倍に伸び店の名も売れ始めた。

当然それに伴い何かと因縁をつけ店を潰そうとする者達が現れたがもれなく全員、輪廻の手によって返り討ちにされる。

面子を大事にする者達がまだ若さの残る小娘を相手に手も足も出なかった事など言えるはずがないので店は見事に守られている。

「このままじゃいつか見つかってしまう。そうなれば店主や女将さんに迷惑が掛かる…よし、逃げよう！」

自分と恩人達の身が心配になった輪廻は、感謝の言葉を記した置手紙と僅かな金銭を置いていき夜中のうちに出て行った。

第四話

店を飛び出した輪廻は取り敢えずぶらぶら歩きながら適当な山に向かい拾った古い日輪刀を数度振ってから考え事を始める。

「うくん…やっぱり全集中の呼吸が出来てない。『表裏反転』のせいで仮とは言え人間に戻ったからかな？」

自分の血気術で鬼化を強制解除し人間化したからなのか肉体の精度が著しく落ちていた。

具体的に言えば柱を軽々上回り上弦の弌として相応しい強さから一般の男にも負けるのではないかと思わせる程に弱体化していた。

だが幸いな事に呼吸への適正は完璧に受け継がれていた。

つまり『天の呼吸』を始めとした『炎』、『水』、『風』、『岩』、『雷』の五つの呼吸も使える事を表す。

己を鍛えればまた『全集中の呼吸』だけでなく『全集中の呼吸・常中』も使えるようになる。

そうすればまた鬼狩りとして活動できる。

その上、本人は気づいていないが『痣』も発現した。だが今度は柱を指すつもりはない。

目指すとしたらせいぜい乙ぐらいで良いだろう。

乙だった頃の給金は自分にとってちょうど良かった。柱になった時の給金など目が飛び出る程の金額だった。

正直貫い過ぎだと思ってお館様に相談したが『輪はその給金を貰うに相応しい活躍をしてきているよ。むしろ足りなくらいさ(ニコツ)』と言ってくれた事がある。

それを酒の席で行名くんに愚痴ったら『なんとも羨ましい悩みだ…南無』とか言ってた。

「懐かしい…ハッ！いやいや、そうじゃない！さっさと自分を鍛え直さないと！」

自分を鍛えなおす事に決めた輪廻は、さっそく昔の修行方法を再現する。

「じゃあまずは…走り込みと筋肉強化^{筋ト、レ}。その後は、各呼吸に合わせて素振り一万回、つまり素振りを合計6万回。それも終わったら型の練習。そして最後に目隠しをした状態での修行と生活…よく生き残れたわね」

嘗て己の育手であり親代わりでもあつた祖父に付けられた修行を思い出した輪廻は震えた。

「じゃあ、始め！」

ダンッ！

一気に駆け出した輪廻は、山をひたすら走り回る。

「うおりゃー!!絶対に強くなって無惨の昆布みたいな頭を切り刻んでやる!ゲホッ!」

まだ未熟な人間の状態に戻った輪廻の体は突然の運動に耐えられず咳き込む。

「まだまだよー!」

だがそれでも諦めず走り続ける。

く3時間後く

「ヒュウ!コヒュウ…コホッゲホッ!ゴホッゴホッ!オエツ…もう二度とやらない」

三時間の走り込みを終えた輪廻は、血気術を解除し鬼に戻った状態で休んでいた。

人間の状態だったら確実に死ぬであろう運動量も鬼の肉体の頑丈さにより死なずに済んでいた。

「うう…素振りを6万回やらないと…」

疲労が溜まった体に鞭を打ち膝を震わせながらなんとか立ち上がる。

「よし…はじめ!」

拾った古い日輪刀を使い実戦に近い形で素振りを始める。

くさらに3時間後く

「う、腕が…痛い」

「全然、十分じゃないですよ！上弦今の式私ならまだしも普通昔の人間私なら確実に死にますよ！」

『そうなのか？私と兄上なら数秒休めば体力が回復したのだが…』

「どんな体力をしているんですか…あなた達兄弟そろって化け物じゃないですか」

『…！』

「なんですかその心外みたいな顔…？」

輪廻は呆れ果てていた。

なぜこんな状況になっていくかという本人にも分からないのである。

輪廻が普通に修行をしていたらいつの間横にこの幽霊：継国公式 縁壺チートが立っていて上弦スベックチートの式である輪廻に助言をし始め最終的には修行を付ける事になったのだ。

なぜ縁壺公式さんがここに来たのかも一切不明。本人が言うには閻魔様に送り返されて気づいたらここに居たとのこと。

輪廻も最近入門出来た『透き通る世界』を使って初めてその存在を視認できるようになった。

そしてその縁壺さんもとんでもない事要求しまくる。

まず最初に要求したのは日輪刀を赤くすること。

すなわち日輪刀の赫刀にすること。

本人が言うには『ちよつと強めにギユツと握ったら赤くなる』との事。

輪廻も赤くしようと力を込めて握ったが中々色が変わらず鬼化状態で握ったらやつと赤くなった。

その次に要求したのは『透き通る世界』を常時維持する事。

普通に無理だと反論したが『極一般的で無力な私に出来て、才能に満ち溢れたお前に出来ないわけがないだろう？』とか言い出す始末。

これにはいつも優しい(?) 輪廻も半ギレ状態でそれが如何に異常な事か、そして自分が如何に神に愛された者なのかを説明したが当の本人は『そんな訳は無い』の一点張りだった。

一時間近くの説得も空しく結局輪廻が折れて修行を再開させた。

『そうだ。その調子で剣を振れ、ただもう少し右手の力を抜いたほうが良い。そうした方が技に威力が増す』

「こうですか？はあっ！」

ブオンツ！

ザシユツ！ズババババツ！！

言われた通りに日輪刀を振ると昔の三倍近い威力の飛ぶ斬撃が発動し前方向の木を大量に切断しまくる。

「あの…『志那都比古』が勝手に発動したのですが？」

『勝手に発動したのではない。お前が剣を振った時に巻き起こった風が『天の呼吸 陸ノ型』と同じ威力を発揮しただけだ。なにもおかしい事はないさ』

「いや…それがおかしいんですよ。ただの素振りで『天の呼吸 陸ノ型』に匹敵する威力の飛ぶ斬撃が使えるって今までの修行は何だったんだ？ってなりますよ…」

さらに強くなれる事への嬉しさと今までの修行よりも遙か早く強くなれた事へのシヨックを同時に感じながら輪廻はひたすら赤くなつた日輪刀を振り続けた。

く日輪刀を振り続けること三日間く

「おや？日が昇ってきましたね」

『そうだな…では、食事の時間だ。何か食べに行こう』

「やったー！」

「ふん♪ふふ…ん!?」ガクツ！

実に三日ぶりの食事に胸を躍らせながら歩いていると急に動きが止まった。

「あの…縁壺さん？」

『なんだ？』

「私の体の支配権を返して頂けませんか？」

『私も食事したい…』

「だったら後で切り替えればいいじゃないですか？」

『ヤダ』

「ええ…？」

結局離れる事を拒否した縁壺に取り憑かれたまま町へ降りる事になった。



町にて

「ふう…食った食った！」

『あれほど美味な物を食べたのは久しぶりだ…体を貸してくれた事を感謝するぞ輪廻』

「いえいえ、助け合いは大事ですよ」

『そうだな』

「輪…さん？」

極普通の定食屋で自分と縁壺の分を食べた輪廻が腹をさすりながら出ると蝶の髪飾りを付けた髪の高い美しい女性…花柱 胡蝶カナエと再会した。

（げえ…カナエちゃん。よりもよって一番会っちゃいけない子に会っちゃったよ！）

『輪廻。彼女はお前の知り合いなのか？』

（元部下で教え子。私が上弦の式と戦う時に逃がした女の子…ついでに再開時に記憶を少しだけ消した）

『強いのか？』

（あなたと比べれば大したことないけど凄く強い）

輪廻が縁壺と話しているとカナエがもう一度、声を掛けてくる。

「り、輪さん！輪さんですよね!?良かったちゃんと生きてた！」

「人違いじゃないですか？」

「え？」

輪廻の言葉にカナエが一瞬戸惑ったような表情を浮かべたがすぐに反論した。

「そ、そんな事無いはずですよ！恩人の顔を忘れる訳がありません！あなたに何度も命を救われて一度もちゃんとしたお礼を言えずに死んでしまったから貴女にお礼を！せめて一言だけでもお礼を言わせて下さい！」

「だから、人違いじゃないですか？私は、その『輪さん』って人じゃないですよ（今は鬼に成って名前も変わったからね）」

「そ、そんな…じゃあ私は誰にお礼を言えば…声も顔も瓜二つなあなたに輪さんじゃないんじや…私は…私は…」

「…じゃあこつちに来てください」

完全に絶望しきったような顔を浮かべ膝を着いたカナエを見た輪廻はいたたまれない気持ちになり近くの茶屋に案内した。

二人は茶屋に移動し個室に入って向き合って輪廻から話を切り出す。

「さて…カナエちゃん。私だってことよく分かったわね」

「やっぱりそうだったんですね！よかったー」

話掛けた相手がかつての恩人だと言う事を肯定して貰えたカナエは安堵の溜め息を吐いた。

それと同時に疑問を覚えた。

「そう言えば輪さん。どうして鬼になったのに太陽の下を歩けるんですか？」

「ブーッ!!」

「キヤッ！」

お茶を飲んでいた輪廻に一番聞いてはいけない質問をした瞬間、輪廻はお茶を吹き出しカナエに少し掛かった。

「げほっ！…ごほっ！いきなりそれ聞く!?もつと他に無いの!？」

「気になったから…駄目でしたか？」

「けほっ！んっ！ダメって訳じゃないけど…出来れば聞いて欲しくないかな？」

「そうですね…この事をお館様に報告していいですか？」

「出来れば秘密にして貰いたいけど…お館様になら良いよ」

「じゃあ、今度はこつちの番だね。カナエちゃんは…」

それから二人は、日が沈むまで色々話した。

それはもうたつぷりと。

しのぶちゃんが可愛いとか、カナヲが可愛いとか、新しく柱に就任

し隊士とか妹たちが可愛い（二回目）とか色々と話した。

「じゃあねー！」

「はいー！さようなら輪さん！」

二人が別れ輪廻が山に向かっている道中、縁壺が質問をした。

『輪廻よ。そろそろ『日の呼吸』を教わってみないか？』

「ご先祖様が再現しようとして結局失敗した呼吸法をやれって言うんですか？無茶言わんでくださいよ。もしもの時は肉体の支配権を譲りますからそこで勝手にやっちゃって下さい」

『そうか…では帰ったら『天の呼吸』の修行だ。あと『透き通る世界』の常中と『全集中の呼吸・常中』の修行もやるぞ』

「…お手柔らかにお願いします」ガクブル

『…善処しよう』

輪廻の恐怖で震えた声に対して縁壺は少し微笑みながら返した。

それから数年の時が経ち

天の呼吸――

「壺の型 天輪」

「弐の型 神隠し」

「参の型 伊邪那美」

「肆の型 伊邪那岐」

「伍の型 八尾比丘尼」

「陸の型 志那都比古」

「漆の型 毘沙門天」

「捌の型 武御雷」

「玖の型 月読」

「拾の型 天照」

天の呼吸を壺の型から拾の型まで順に放って行きゆっくりと降り立つ。

「どうですか？」

『うむ。完璧だ』

「よし！」

全ての型（見せられる分だけ）をやり終えた輪廻の質問に縁壺は合格判定を出す。

「じゃあ二回目の最終選別に行ってきます」

『じゃあ行こう』

「あ、やっぱ付いて来るんですね…」

『一応…それよりも仮面を買って行く事を勧める』

「それもそうですね。顔バレとかしたくないし…」

二人は他愛もない会話をしながら最終選別の舞台である藤襲山に向かう。

その道中しっかりと狐の仮面を購入してから藤襲山に向かった。

第五話

藤襲山に到着した輪廻は盛大に顔を顰めた。

それも狐の仮面を付けていなければ一発で周りにバレル程に。

それもその筈、藤襲山は鬼を閉じ込めておくために鬼が苦手とする藤の花が年中咲き乱れる山であり上弦の鬼となってしまうた輪廻にとってこれ以上に居辛い場所は存在しない。

『輪廻…大丈夫か?』

「全然大丈夫じゃないです…正直すぐにでも帰りたいです。でも帰ったら入隊できなくなるので我慢するしかありません」

縁壺の質問に輪廻は仮面の上から口元を押えながら答えた。

『そうか。なら…あれは?』

『どうしました?』

『…炭吉』

『誰です?』

縁壺は太陽の模様が入った狐の仮面を被った花札のような耳飾りを付けた少年を見つめながらなにか呟く。

『私が生前に託した想いが今も受け継がれている…想いは人から人へと受け継がれていきやがて大きな力となる。彼は私の想いを継ぐ者のようなのだ』

『良かったですね…貴方の残した想い耳飾りが受け継がれていて』

縁壺の言葉を聞いた輪廻は微笑みながら声を掛けた。

(一体どういう事かしら?)

ただし良く分かっていなかった。

「皆さま、お待ちせしました」

「これより最終選別を開始いたします」

それから暫く待っていると黒髪と白髪の双子が現れた。

(お館様のご子息? 片方は男児でもう片方は女児…そう言えば五つ子が生まれたとか言ってたわね。懐かしいなあ)

柱だった時の事を思い出して過去に浸っていると双子がいつの間

にか説明を終わらせ数人が入山し始めていた。

(あれは…カナヲちゃん?)

入山していく者の中に蝶の髪飾りを付けた女の子を見つける。

「行っちゃった…」

声を掛けようとしたが先に入山してしまったので声を掛けられなかった。

「うっ…この匂い結構キツイですね」

『輪廻、『透き通る世界』が解けているぞ?』

「ヒッ!」

縁壺に掛けられた言葉に輪廻が反射的に両目に力を入れて『透き通る世界』を発動した。



「ヒヤッハー!久しぶりの餌だ!!」

「邪魔すんじゃないやねえ!こいつは俺の物だ!!」

「待って待って!この女は俺が貰う!!」

藤襲山に入山し藤の花の匂いがしない所まで来るとすぐに雑魚鬼達が襲い掛かって来た。

「水の『日の呼吸 円舞』」

ザシユシユシユツ!

水の呼吸で迎え撃とうとしたがなぜか縁壺さんに体の支配権を無理矢理奪われ『日の呼吸』を使った。

「あの…縁壺さん?」

『なんだ?』

「勝手に『日の呼吸』を使わないでくれますか?その動きに体が追い付かないから最初の頃なんか骨折しまくったの忘れたんですか?」

『すまない…鬼を見るとつい反射的に攻撃してしまうのだ』

「私も鬼ですよ?もしかして最初に会った時も攻撃したんですか?」

『……………』

縁壺の恐ろしい癖を知った輪廻の質問に縁壺は無言で返した。

「まさか攻撃したんですか!?ひど過ぎません!？」

『すまなかつた…』スウー

「あつ！消えた！」

なぜか恐怖を感じた輪廻に対して縁壺は一度頭を下げたから消える。

「そう言えば…食料どうしよう?」

今更ながらかなり重要な事に気づいた。

「大した道具もないし…日輪刀もさっきので根元からポツキリ折れちゃったし…どうしよう?」

持ち手だけになってしまった日輪刀を見てから歩き始める。

「うくん、こうなったら…」カツ!

「女!餌!食う!!」

歩いていると茂みの中から比較的強い鬼が飛び出すが…

メキヨ…

「鬼化状態でやり過ぎすしかないね…」(暗黒微笑)

ズガンツ!!

血気術を解除し上弦の式に戻りながら襲い掛かってくる鬼の頭を握りつぶし地面に叩き付ける。

「お、お前は…じ、上「ザシュツ!」げ…ん」

再生し始めた鬼の頸を手刀で跳ね飛ばし遙か昔(20年程前)の記憶を頼りに山の中にある洞窟に向かう。

「あれ?迷っちゃったかな?」クスクス…

ワザと迷い声を大きく発して鬼をおびき寄せる。

「餌…餌が迷ったのか?なら案内してやるよ!俺の胃袋の中になー!!」

「待ってました!」

襲い掛かる鬼の顔面を掴み思い切り地面に叩き付けてから尋問を開始する。

「さて…君にいくつか質問するね?ちゃんと答えてくれればすぐに楽

にしてあげるよ?」

輪廻はそう言いながら折れた日輪刀の刀身を自分の手が斬れないように掴み馬乗りになって鬼の胸元に突き刺す。

「あがああ!!いい、痛てええ!!チクショウ!」

「うるさいよ!」

バキョツ!

「あつ…やつちやった…」

ついイライラしたので反射的に鬼の顔を殴り頭を潰してしまった。

「待つか…」

そのまま少し待っていると鬼の頭が再生した。

「ひっ、ひいい!!」

「いくつか質問するから正直に答えなさい。分かった?」

「は、はい!!」

完全に頭が再生した鬼にいくつか質問をする。

「あなたが日中潜んでいる洞窟はどこにあるの?」

「ここから北西に少し歩いた所に鬼達が潜む場所がある。俺もその出身だ」

「ふくん…じゃあ質問。私の日輪刀知らない?」

「お前の?」

「そうよ。白と黒がお互いを侵食しようとしているような模様の日輪刀よ。知らない?」

「み、見た事ねえ…」

「そう…ならもう用済みね」

「な!?ちよ、まつ!」スパツ…

質問を終わらせ頸を斬り飛ばす。

「よし…日が暮れているうちに洞窟に向かおう」

立ち上がり言われた方角へと歩いていると鬼に襲われたのである。新鮮な死体が転がっていた。

「ひどいものね…」

『輪廻…大丈夫か?』

急に何か考え事をするかのように足を止めた輪廻に疑問を覚えた縁壺が質問を投げかける。

「ふ、ふふ…ふふふーアハハ！アハハハハハッ!!」

『輪廻、大丈夫か?』

それに対して急に狂ったように笑い始めた。

「せっかく柱まで上り詰めたのに…その地位を命懸けで守り続けたのに…守り続けた地位を…人間の体を捨ててまで得た鬼の肉体を持つてしてもやっぱり守れない命はあるもの…そう思いませんか?縁壺さん?」

『…輪廻よ。私も生前鬼を滅するために剣を振るった。大切な者を守れなかつた後悔から私は鬼狩りに入った。鬼狩りの者達に各々に合つた呼吸法を教え兄上とも一緒に戦っていた…だが、それでも救えない命はあつた。鬼無辻をあと一步の所まで追い詰め取り逃してしまいそれが原因で鬼狩りを追放された…そして鬼となつた兄上にトドメを刺す直前で私は天寿を全うしてしまつた。こんな私の言葉でいいのなら聞いてくれ…人は生まれながらにして完璧じゃない。周りとの関わりを得て人は成長する。私にはその成長が足りなかつた…だから鬼無辻を取り逃がし鬼となつた兄上を倒せなかつた。だがそれでも前に向かつて歩き続けるしかない先人達の想いと犠牲になつた者達の想いを積み重ね鬼無辻の頸を斬り飛ばさなければならぬ…』

仮面の下で悲しそうな目をした輪廻に対して縁壺は可能な限り励まし、それを聞いた輪廻は…

「縁壺さん…」

（あなたの場合は最初から完璧なんですよ?なにが『人は生まれながらにして完璧ではない』つて、あんただけには言われたくない言葉ですよ!て言うかあの鬼無辻^わ無惨^かをあと一步の所まで追い詰めたつて普通に頭おかしいですからね!?鬼に成つた兄上にトドメ刺す直前で絶命したとか言ってるけど、その兄上つて私が『天の呼吸 零の型』から『終の型』まで惜しみなく使つてやつとの思いで倒せた

『先代^童上弦^磨の式』や、まだまだ若かった頃に『伊邪那岐 108連』を使つて倒した『上弦^半の肆^天』とか全盛期なら私よりも強かつたお師匠^爺様を殺した『上弦^狩の参^座』よりも強い『上弦の壺』なんですよね!? それを汗一つかかずに追い詰めたのにあんただんだけ自己評価低いんですか!!? 逆にやる気が出て来ましたよ!!』

色々とツツコミを入れたい気持ちを抑えながら遺体から日輪刀を拝借して鬼に教えられた洞窟に向かう。

そのまま少し歩いてると洞窟に着いた。

「まあ、暗い訳ですよ。『透き通る世界』のおかげで普通に見えますけどね…」

『習得して良かっただろ?』ムフフ

「なんでドヤ顔なんだ『ブチッ!』眼があ!眼があー!!」

『どうしたんだ輪廻?』

「眼球内の血管が切れました!」

『慣れない事をするからだ…』

「あんた鬼畜か!」

そんなやり取りをしていると洞窟の中から5体の鬼が出て来る。

「ああ?こんな時間にわざわざ餌のから寄つて来てくれるとはなあ…」

「キヒヒヒ!バカな奴も居たもんだぜ」

「クンクン…おい、こいつ女だぞ?」

「本当か?なら俺が貰う!」

「させるか!俺が先だ!」

などと下らない争い事をしていたのですぐに倒した。

「天の呼吸 玖の型 月読 三日月!」

目にも止まらない速度で五体の鬼の頸を一齐に刎ねてから日輪刀を鞘に納め洞窟の奥へと進んで行く。

「なんもない…丁度いいけどね」

なにもない事を確認し太陽の光も入って来ない場所に移動してから血気術で人間（仮）に変化し泥のように眠った。

『…輪廻、起きろ。誰か近づいて来てるぞ！』

「んむう…誰？」

縁壺の言葉に起こされた輪廻は半分寝た状態のまま腰を低く落とし日輪刀を居合いの形で構える。

「ひい！鬼!?!女の子!!?君はどっちなんだよ!!?」

「…誰？」

洞窟の入り口を見るとタンポポみたいな頭の黄色い羽織を羽織った少年が立っていた。

（いや、ホントに誰？）

第六話

『輪廻起きろ。誰か来てるぞ』

「んむう？」

縁壺さんの言葉に起こされて洞窟の壁に立て掛けてあった日輪刀を手に取り腰を深く落として構えて洞窟の入り口付近に立っているタンポポみたいな頭をした少年を見る。

(誰だろう?)

寝起きの頭のせいで少年が騒ぎながら言ってる事が聞き取れない。

「君は鬼なのか!?!どうなんだ!」

「うくん…」

やっと聞き取れたけど…やばいな。

「…ゴクリ」

あの子が凄く美味しそうに見える。

鬼なのに2年くらい人を食べずに居たせいなのかな?月に数回の^{ペース}周期で妙に人肉が食べたくなる。

(人肉を食べたいって衝動を抑えられなくなる前に早くどっか行ってくれないかなあ?)

そんな事を考えながら『天の呼吸 肆の型』の構えを取る。

「き、君は、なんか危なそうだから俺はこれで失礼するよ!!」

そう言いながらタンポポみたいな頭の少年がどこかへと走り去った。

「なんだったんだろう?」

疑問に思いながらも寝る前に外した狐の面を被り洞窟の外へ出る。

外へ出ると燦々と照り付ける太陽が全身に降りかかり凄く気持ち良くしてくれる。

「うくん!良い天気ね!そう言えば縁壺さん。今日って最終選別の何日目か覚えてますか?」

『ああ、確か今日で6日目だ。明日が最終日のはずだが、今日はどう過ごす?』

「うくん…じゃあ、何か食べられる物でも探しましょうか。いくら一週

間食せずに過ごせるとは言え何も食べないのは流石にキツイので野ウサギでもなんでも良いので食べたいです」

縁壺さんと話しながら藤襲山を散策するが何も見付からない。

見付かるのは、死体と日輪刀だけ。

その中から『風の呼吸』と『岩の呼吸』の使い手の日輪刀を勝手に拝借し、さらに山を歩き続ける。

途中で川が見つかったのでそこで少し休憩してから再び歩き続ける。

歩き続ける事、数時間。やつとの想いで野ウサギを捕まえた。

「一週間ぶりの食事…もう我慢できない!」

空腹が限界に達していたせいで生の野ウサギにかぶりつく。

「ああ…美味しい。久しぶりのお肉ってこんなにも美味しいんだ…」

野ウサギの肉を口の中で味わっていると何かが草むらから何かが飛び出す。

「ん?」

「…!」

キイイイン!!

いきなり剣を振って来た何かに対抗するように、こちらも剣を抜いて受け止めると影は驚いた様子で目を見開いた。

(カナヲちゃん…?)

いきなり攻撃してきた影が知り合いの家族だと認識し首を傾げる。

「なぜ攻撃してきたんですか?」

「…」

「答えて下さい。私はあなたに攻撃されるような事はしてませんよ?」

「…」

「だんまりですか…まあ、いいでしょう」

何を聞いても答えなかったので食事中の野ウサギを捨てて山の中へ走り去る。

山の中を走っていると日が落ちて夜になった。

「ええと、今日はここの洞窟でいいや。つてあれ?先客がいましたか」

洞窟に入るとすでに誰かが寝る準備をしていたので交渉のため話しかける。

「こんばんは。今夜は月が綺麗ですね?」

「こんばんは。確かに今夜は…えっ!」

挨拶をするのとあちら側も挨拶を返してくれたが途中で止まった。

「ぎゃああ!!君は今朝の鬼みたいな音の女の子!?!なんで狐のお面なんか被ってるの!?!って言うかどうしてこの洞窟に来るの!?!俺なんか食べても美味しくないよ!」

私の事を思い出したのかタンポポみたいな頭の少年が叫びだした。

「あ、あの!落ち着いて下さい!!いやホント!マジで!!」

タンポポ少年(仮称)にそう呼びかけるが一向に落ち着かず騒ぎ続ける。

どうやって落ち着かせようかと考えていたら何故か気絶した。

「あ、あれ?気絶し…っ!?!」

ガキイイイン!!

突然気絶したかと思つたら急に攻撃してきた。

刀を抜くのが一瞬遅ければ日輪刀が頸に食い込んでいたかもしれない。

「気絶してから強くなるって…不思議な人もいるもんですね」

『そうだろうか?…私が見て来た中には食事の際『わっしよいわっしよい!』と叫ぶ者や『美味しい美味しい!』と叫ぶ者が居た。確か初代炎柱だったな』

「初代から変わらないとか煉獄家の血筋ってすごいですね…」

『今も変わってないのか?』

「はい、榎寿郎さんも杏寿郎くんも相変わらずです。千寿郎くんだけはまだ、おっと!」

縁壺さんと歴代炎柱の話をしているとまたもやタンポポ少年が頸を狙って振り抜いた一太刀を後ろへ一歩飛んで躲す。

「全集中・常中は出来てないけど新入りの隊士にしてはかなりの腕前ですね。あと数年早ければ継子にしたかったです」

『お前の稽古が厳しすぎて逃げられたのではなかったか?』

「上手く手加減が出来なかつただけです…そのせいで何人かの心を折ってしまいました。初代炎柱様の心を折った貴方よりかはマシだと思います」

この女、入隊当時から手加減がヘタクソ過ぎて隊の輪を乱すとの事で一人で活動させられていた時期があつた（その期間中に上弦を倒してしまった）。

柱に成つた後もそれは変わらず継子候補を毎日必要以上に叩きのめし、ついには心をポツキリ折ってしまい全員を隠に転職させてしまった。

当時のお館様にも注意を受けたのでそれ以来継子を取ろうとした事は無かつた。

一方の縁壺さんも生存時に初代炎柱から『日の呼吸』のやり方を聞かれ『同じことをひたすら繰り返せば出来るよ（意識）』と言い放ち当時の炎柱の心をポツキリ折ったりしてるのでどっちもどっちである。

「じゃあ、帰りましょうか」

この洞窟で一夜を明かす事を諦めた輪廻は、さつさと洞窟から出て行き適当な木の陰で眠りについた。

く朝く

「ふあああ…むにやむにや。もう朝か…んむ？縁壺さん、どうして私の身体の支配権を勝手に奪つてるんですか？」

朝日で目を覚ますと何故か縁壺さんが私の身体を勝手に使っていた。

『む？やつと起きたか輪廻。お前が寝てる間に色々と物事が進み玉鋼と鏃鴉を貰ったのだが、それでも起きないから適当な宿を取って日輪刀が届くまで待っているのだ』

「え…？私、何日くらい寝てましたか？」

『確か2週間ぐらいだろうか？もうすぐ日輪刀を作った刀鍛冶の人間が来るぞ準備しておけ』

縁壺さんの言葉を聞き心底驚いた。

まさか、そんなに長い間寝ていて、私が寝ている間に私がやるべきだった事を全て代わりにやってくれていたとは…感謝しかない。

「あの…縁吉さん。ありがとうございます」

『別に構わない。困ったときは助け合いだろ?』

「縁吉さん…ありがたい事言ってる所悪いのですが藤襲山で拾った日輪刀が両方とも折れている理由を教えてくださいませんか?」

礼を言うついでに腰に差していたはずの日輪刀の刀身が真ん中くらいで折れている理由を縁吉さんに質問すると私が寝ていた二週間の間起きた出来事を語り始めた。

『うむ、そうだな。あれは…最終選別が終わって朝日が昇り始めた時の事だ。玉鋼を選べと言われ、お前に合う鋼を選び鴉を待っていたら『小次郎』と名乗るかなり年老いたのが近づいて来て肩に乗ったんだ。なんでもこの身体肉体から懐かしい気配を感じたそうだ』

なるほど。ここまでは、常識の範囲内だ。私に合う玉鋼を選んだという点にさえ目を瞑れば。それと小次郎と名乗る鏝鴉は、私が柱だった頃に世話になっていた鏝鴉の名だ。まさか鬼に成った私の事を覚えてくれるとは…嬉しい限りだ。

『その後で色々あつて刀が折れて今に至るわけだ』

「いやいや、ちよつと待って下さい。その色々の部分を説明してくださいよ!その色々の部分で何が起きたんですか!」

話を簡潔に纏めようとした縁吉さんに突っ込みを入れながら説明を求めると、不思議そうな顔をしながら説明を続ける。

『最終選別が終わり藤の花紋の家に来た夜の事だ。家の主人に協力しようと思いい何か出来ないかと聞いたのだ。それなら薪にする木を取って来てくれと頼まれて山奥で適当な木材を取っていたら鬼にいきなり襲われたのだ。その鬼は、『今の一撃を躲すとは素晴らしい実力だ。それにその練り上げられた闘気も最高峰の物。見た所お前も鬼狩りの者だな?お前に一つ素晴らしい提案をしよう。鬼に成ってみないか?鬼になれば永遠に生きられ好きだけ鍛錬が出来るぞ?どうだ、鬼に成ってみないか?もちろん断れば殺すが』と訳の分からない事を言ってきたのだ。なのですぐに首を刎ねて倒した』

「縁吉さん…その鬼の特徴を教えてくださいませんか?」

うん…なんか凄い嫌な予感がするけど、これだけは聞いて置きた

い。

『あの鬼の特徴：桃色の短髪で両腕に青い線が入っていた。肌は白く、不思議な装束を身に纏い両足に数珠のような物を嵌めていた。あと、何かしらの武術を使っていたようだ…』

「そう…ですか。あの…その鬼の目に何か数字とか刻まれてませんでしたか？」

まさか、ありえない。と思いながらも一番知りたい事を聞いてみる。

『数字…そう言えば片方の目に参と刻まれていたな。名前は…確か……アカザ？と名乗っていたと思う』

「アカザ…猗窩座か…なるほど」

拝啓お爺様お師匠様、連どうやら私の知らないうちに二人の敵討ちが済んでいたようです。ここは仇を討ってくれた縁壺さんを一発殴るべきですか？それとも感謝するべきですか？私には分かりません。

『輪廻…日輪刀を持って来る者を待っている間に何かして遊ぼう。私が生きてる間に出来なかつた遊びをやってみたい。特にこの独楽回しとやらが楽しそうだ。一緒に遊んでくれないだろうか？』

窓の外の雲一つない空を見ながら考え事していると縁壺さんが捨てられた子犬のような目で部屋に置いてある遊び道具を指さしながらこちらを見て来た。

「ふふふふ…：よろしい！遊びの鬼と呼ばれたこの私がお相手しましょう!!」

なんだか子供みたいだったのでしようがなく付き合つてやるでしょう。

独楽回しは、天柱時代に若様お館様と遊ぶ時と入隊したばかりの義勇君を元氣付ける為に真菰ちゃんやカナエちゃん達と一緒に遊んだ以外やった記憶はないが…まあ、素人相手なら如何にかなるだろう。どうせなら今夜のおかずでも賭けよう。

く六時間後く

あれから六時間ほどが経ちお昼時も超えて私は、縁壺さんと将棋を打っていた。

「うう…ぐぐぐつ…あれはダメ…これもダメ。飛車も角も取られた…将も全員落ちた…桂馬は動けず香車は、役に立たない…」

『どうしたんだ輪廻？お前の番だぞ？』

「クツ…うぐぐ…うう！ま、参りました！」

『そうか…これでお前の煮物は獲得した。では最後の一局をやろう。今度は、飛車、角、金将、銀将だけでなく香車と桂馬も全部落としてやる。輪廻、もう少し防御を固めた方が良いぞ？』

「居飛車穴熊を突破できる人に言われても…私が知ってる中では最強の囲いなんですけど？まあ、どっちみち今夜の晩御飯は白米だけになってしまいましたね…ははっ、はあ…」

途中から面白くするために晩御飯のおかずを賭けた勝負を持ちかけたが結果は、惨敗。

白米以外の全てのおかずを取られた。

一応鬼殺隊の中でもお館様や鱗滝さん、桑島さんに次いで強かったのに…槇寿郎さんを一方的に圧倒出来たのに…なるほど、初代炎柱様が自身を失うのも分かる気がする。

それ以前に独楽回しや双六に花札で一勝も出来なかった…私って本当に強かったっけ？

「はあ…では最後の一戦を始めましょう」

『おっと、待て輪廻。まだあの台詞を聞いてないぞ？』

「いいでしょう…私の晩御飯の白米を賭ける！」

『良いだろう。なら私は、天麩羅と煮物を賭けよう。さらに佃煮と汁物も一緒に賭ける』

「わ、私から奪った晩御飯の品を全部…ですって!？」

『お前に有利な条件と状況だ。これなら勝てるだろう？』

「ふっ…私を嘗めた事を後悔させてあげます！」

私の宣言と共に私のおかずを賭けた最後の一局が始まった。

〜数十分後〜

「ふふふふ…これで王手です！」

長い長い戦いが終わり飛車の駒を縁壺さんの玉将を狙える場所に置いた。

遂に縁壺さんに勝てた。と思ったがその考えは次の一言で壊された。

『甘いぞ輪廻、逆王手だ。よく見てみる』

「えっ…？あっ!？」

私が飛車を置いた場所は、縁壺さんが私から奪った角行で王将を狙える位置。つまり知らず知らずのうちに自分の守りに穴を開けてしまった。

「ち、ちよつと待って下さい！一手戻させて下さい!!」

『駄目だ。待ったは一回までだ…では、これで終わりだ』

「いやああああああああ!!!私の晩御飯んんん!!!」

私は、負けた。自分でも驚くほどあっさり。そして晩御飯の白米すら失った。

「うう、うぐっ!グスツ…!うううう…私の晩御飯…」

『輪廻…ふと思っただが、どうせ食べるのはお前の体だからこんな賭けをしても意味があつたのだろうか?』

私が泣いていると縁壺さんがそんな事を言い始めた。

「あっ……………意味無い」

そして今までの賭け事が一切意味を持たない事に気づいてしまった。

「縁壺さん…」

『なんだ?』

「双六でもやりませんか?」

『良いだろう』

賭けが一切意味を持たないので刀鍛冶の里の人が来るまで普通に縁壺さんと遊ぶことにした。

第七話

「ふいふ、やっと着いた…」

「お疲れ様です」

藤の花の家紋の家で三日間待機していた輪廻上弦の式（鬼殺隊士）と継国公式 縁壺チート（幽霊）の下に刀鍛冶の里の鍛冶職人がやって来た。

「えーと、あなたが輪廻って人であってますか？」

「はい、合ってますよ」

「それは良かった。では自己紹介させて頂きます」

狐の面を被った輪廻の言葉に頷いた火男の面を被った刀鍛冶の里の鍛冶職人が一度、頭を下げてから自己紹介を始めた。

「私は、金剛坂こんごうざか 哲雄てつおと申す者です。この度は輪廻さんの日輪刀を打たせて貰いました。これからも貴女様の日輪刀を打たせて頂きますのでどうぞよろしくお願い致します」

「いえ、こちらこそよろしくお願い致します」

狐の面を被った女性鬼殺隊士（34歳 未婚）と火男の面を被った刀鍛冶職人（28歳 既婚者）が互いに腰を低くして話すという何気にシユールな光景が続く中、日輪刀についての説明が終わり日輪刀を持って来た金剛坂さんが輪廻に日輪刀を手渡す時にちよつとした問題が起きた。

「では、こちらが日輪刀でございます。誠心誠意打たせて頂きました」

「感謝申し上げます…ですが、一つだけお尋ねしても宜しいでしょうか？」

「何でしょう？」

「なぜ私の日輪刀が二振りもあるのです？私は別に二刀流の剣士と言う訳ではありませんよ？まあ、扱えなくは無いですけど…」

何故か輪廻の日輪刀が二本あったのだ。

それを疑問に思った輪廻は、素の状態で質問した。

そもそも全集中の呼吸は、例外を除けば基本的に日輪刀一本で事足りるのだ。

稀に予備の武器として小刀サイズの日輪刀を持つ鬼殺隊士もいる

がそれは本当に極稀である。

それよりも薙刀のような形状をした日輪刀や鎖鎌、斧と鉄球を扱う者や帯のように薄い日輪刀を扱う者が多いぐらいだ。

かく言う輪廻も柱時代に何回か日輪刀を折る事はあったが刀一本で鬼の頸をを斬りまくっていた(童磨戦で使用した日輪刀は、28代目)。

なのはどうして日輪刀が二本もあるのか?それも両方が同じ大きさの太刀と呼ばれる普通の日輪刀かを理解出来なかった。

『輪よ。お前に一つ面白い事を教えてやろう。いいか?天の呼吸の最後の型。つまり15個目の型はな…27代目継承者が日輪刀を二本持った状態で生み出したんだ。つまり『天の呼吸 終の型 高天原』は、二刀流で初めて完成する型って訳だ』

『なるほど…理解しました。ですがお爺様なぜ今になってそれを私に?』

『なぜって…そりやお前え。お前が天の呼吸の35代目継承者候補だからよう。俺が死ぬ前に話して置こうと思つたって訳よ。分かるか?』

『まあ、分かりますが…それよりも寝ていいですか?明日は、連と一緒にお団子を食べに行く予定なので』

『おう。んじやおやすみ!よく寝ろよ』

(なるほど…思い出しました)

『……………?』

過去の記憶を思い出した輪廻は色々と納得したが輪廻の横でぶかぶか浮かんでいる縁壺は僅かに首を傾げた。

『二本も不要でしたか…ならば一本持ち帰らせて頂きますか?』

『いえ、これで結構です。ありがとうございます』

金剛坂が刀を一本持ち帰ろうとしたが輪廻が慌てて止めた。

『そうですか…では、早速その日輪刀を抜いてみて下さい。貴女の扱う呼吸に合わせて日輪刀の刀身の色が変わりますので』

『わかりました。では…』

金剛坂の言葉に頷いた輪廻は早速、鞘から日輪刀を抜いた。

「おお…！」

「これは何とも珍しい…」

『白と黒の日輪刀か…』

日輪刀の鍔から刀身全体が黒く染まったかと思えば日輪刀の刀身が白く染まつていき白と黒が入り混じったような斑模様になった。

「ふくむ、白と黒の斑模様か…今まで何本もの日輪刀を見て来たが歴代の柱達ですらこんな模様をして無かったな。何の呼吸なんだ？」

「それは聞かないで下さい。それよりも金剛坂さん、本日は、ありがとうございます。ありがとうございました。お礼と言つては何ですが…こちら、浅草で買って来たカステラです。お土産にでもどうぞ」

話を逸らすため予め用意しておいたカステラを手渡した輪廻は、さつさと金剛坂を帰らせた。

「ありがとうございます。では、またいずれ」

「はい、またいずれ」

最後まで両者が腰を低くした状態で会話した。

「カーカーカー!! 輪廻、任務ダ!! 北東ノ山ニ鬼ノ目撃情報ガアツタ! スグニ向カエ! ホラ、ハヤク! ハリーハリー!!」

「わ、分かったから突かないでよ!」

輪廻の頭に乗っかり頭を突きながら急かす鎧鴉の言葉に輪廻は、大慌てで準備した。

準備を全て済ませた輪廻は、藤の家の人達に礼を言ってから任務に出掛けた。

◆ 「一応着いたけど…鬼なんて何処にもいないなあ…」

北西の山に着いた輪廻は、常時発動している透き通る世界を行使して鬼を探すが一向に鬼が見当たらない。

「カーカーカー!! ココダ! サツサト鬼ヲ倒シテ次ノ現場ニ向カエ!」

「分かっているけど、いないじゃない!」

「ナラ探セ! 何処カニ居ルハズダ!」

むちやぶりをしながら頭を突く鴉の言葉に輪廻は山中を走り回る。

爆発的な筋力で日輪刀を両手で全力で握り締め赫刀に変化させて鬼の頭に叩き付けた。

「がっ…!? あがっ…いい、痛えっ…!!」

「帰れー!! 消えろー! 死ねカスー! この虫けらー! クソ妖怪!! 無駄にデカイ鬼! ゴミ虫! 死ね死ね死ね!! 死ねー!!!」

ムカデ鬼の頭蓋に当たる場所を一発で叩き割ってから鬼の頭を何度も何度も全力で踏み潰した。

「はあはあ…や、やったか!？」

「クソ…が…このクソが! ぶっ殺してやる!!」

「こっち来んな! 小次郎さん! 離れて!」

頭部を再生させながら再度突進してくる大百足鬼に対して担当鴉である小次郎を逃がしてから日輪刀で上段突きの構えを取る。

「くたばれクソアマ!!」

「天の呼吸 漆の型 昆沙門天!!」

突進する大百足鬼の脳天に神速で日輪刀を突き刺し数メートル後方に押されながらも突進を止める事に成功する。

そのまま日輪刀の刃の向きを下から上に向けて斬り上げてから腰に帯刀しているもう一本の日輪刀を逆手に持ち突き通る世界で確認した頸に当たる節の部分に日輪刀を滑り込ませ一呼吸の内に斬り飛ばした。

「嘘…だ! あり得ない…あのお方に下弦の肆の位を与えられたこの俺が…! イヤだ! イヤだ!!」

「諦めなさい…ちゃんと看取ってあげるから安心して逝きなさい。…クソ虫め」

崩れゆく鬼を横目に見ながら日輪刀を振って付着した鬼の血を飛ばし両刀を鞘に納める。

「ああ、母さん…お母さん。寒いよう、手え握ってよ…!」

「分かったわ…」

少しずつ崩れながら死にゆく百足鬼の言葉に輪廻は、そつと手^足を握った。

「ああ、温かい。ありがとう…母さん」

「……………うん」

百足鬼が完全に崩れたのを確認してからすぐ横に立っている縁壺（幽霊）を見ながら口を開く。

「ねえ、縁壺さん」

『どうした？』

「私…結婚した事も子供を産んだ事も妊娠すらした事も無いのに
お母さんって呼ばれました。どう思いますか？」

『……………』

「何か言つて下さいよ！小次郎さん！あなたはど思いますか！」

「少シ休ンデカラ次ノ現場ニ向カエ…何ナラ浅草デカ茶菓子デモ買ツ
テ行クカ？」

「慰めはいらん…」グス…

一人（故人）と一匹（鴉）に話をはぐらかされた輪廻（鬼）は、仮
面の中でひっそりと泣いた。

「次の現場は何処ですか？」

「南方ノ村ダ…ソコデ動物型ノ鬼ガ目撃サレタ。サツサト行クゾ！」

「分かりました」グスツ…

輪廻は半泣きの状態で次の任務に向かった。



く同時刻く

無限城にて

鬼の首魁であり全ての鬼の始祖でもある鬼無辻 無惨が洋物の服
を着て帽子を深くか被った状態で無限城を歩いていた。

「黒死牟…出て来い」

ベンツ！

「はっ、こちらに…」

鬼無辻の言葉に反応するかのように琵琶の音が鳴り響き空中で障
子が開き、中から着物姿の異形の鬼、黒死牟が現れた。

「無惨様…いかがなさいましたか？」

「……………」

「無惨様…?」

質問しても黙ったままの無惨に違和感を覚えた黒死牟は再度質問するが相変わらず反応が無い。

「あ、あの…無惨様?」

「黒死牟…」

「はっ!」

やっと反応した無惨に対し黒死牟は、少し驚きながら答えた。

「輪廻を生み出してから早二年…あいつの思考を読めず位置も分からず呪いも発動しなかった」

「…」

無惨が完全に疲れ切ったように説明を始めた黒死牟は黙って聞いた。

「あいつを野に放ってから下弦の肆が殺され…猗瑠座も倒された。そしてほんの数分前に新しく作った下弦の肆がまた殺された…」

「…」

「如何やらあいつは…鬼狩り共の味方をしているらしい」

「無惨様…」

輪廻についての説明を受けた黒死牟は、怒りが込み上げて来た。

それもそうだろう。

弟を超える強さを得るため400年前、鬼に成りその長い年月をひたすら鍛錬を続け上弦の壱に相応しい強さを得た黒死牟に近い実力を誇る上弦の弐である輪廻。

童磨が倒されたと聞いた時は、童磨の弱さに対して落胆し童磨や半天狗を倒した鬼狩りの柱の強さに対する純粋な興味と新たな好敵手に出会えた喜びがあった。

更に己の主から童磨と半天狗を倒した鬼狩りの柱を鬼にして童磨の後釜にしたと聞いた時は、心の中で百数年ぶりに狂喜乱舞した。

久しぶりに自分と戦える強さを得た鬼が現れた。その鬼を鍛えて自分に入れ替わりの決戦を申し込めるまで強くしようとも思った。何なら猗瑠座の相談相手にでも成ってくれば上々と考えていた。

だが結果は如何か。自分と上弦の壱としての座を争うに相応しい

力を得た輪廻と呼ばれる鬼は、あろうことか敵勢力の鬼殺隊に加わり
猗塙座と新たに作られたらしい下弦の肆を倒した。

これは完全に謀反と捕らえても良いだろう出来事だ。

黒死牟のように主へ忠誠を誓う武人氣質の鬼にとっては許し難い
行為である。

「黒死牟…」

だからこそ主の次の言葉に力強く答えた。

「輪廻を殺せ！」

「はっ！お任せ下さい！！」

六つの目に怒りの炎を燃やしながら黒死牟は、歩き出した。

「因みに何処に向かえばよろしいのですか？」

「…那田蜘蛛山へでも向かえ、累には私から連絡しておく」

「かしこまりました」

ベントツ！

最後に琵琶の音が鳴り響き、黒死牟が無限城から姿を消したのを確
認した無惨は、初めて帽子を脱いだ。

「ふう、輪廻め…今度会ったら地獄を見せてやる！」

帽子を脱いだ無惨の頭は、見るも無残な事に成っていた。

髪の毛の約七割強が抜け落ちた原因が輪廻にあると考えた無惨は、
今にも爆発しそうな怒りを何とか抑えようとしていた。

第八話

いつも通り鬼化しても柱だった頃と変わらず鬼の頸を斬って斬って斬りまくり、藤の家紋の家で休憩させて貰ったり宿を取ったりしながら鬼殺隊士としての任務を勧めているといつの間にか階級が『辛』まで上がっていた。

昔の知人風に言えば、すぴーど出世（？）ってやつだろう。

出世速度にも驚いたが縁壺さんと話しながら、それよりもずっと重要な事に気づいた。

「天の呼吸の基本の拾の型って初代天柱先祖様が五つの呼吸を極めた後に『日の呼吸』を再現しようとした結果生まれた呼吸法だったんですねえ…知りませんでした」

『まあ、教えなかったからな…』

そう。私がお師匠様から教わった『天の呼吸』の型は、全て『日の呼吸』と他の五大呼吸を模していたのだ。

言われて見れば結構似てる。

『天の呼吸 壺の型 天輪』は、『水面斬り』の斬撃に『碧羅の天』の威力を上乗せした感じだ。

『式の型 神隠し』の足捌きは、『流々舞い』の足捌きにそっくりだ。さらに言えば『幻日虹』のように回避に使えるし『飛輪陽炎』みたいに相手の目算を狂わせる効果もある。

『参の型 伊邪那美』を『生成流転』のように連続して使えば劣化版『日暈の龍 頭舞い』に変化する。

さらに言えば『肆の型 伊邪那岐』は、『雷の呼吸』に似てる。

『伍の型 八尾比丘尼』は、『岩の呼吸』のしっかりとした構えに防御特化に変化させた『灼骨炎陽』を付け加えた感じだし、『漆の型 毘沙門天』に至っては完全に『陽華突』と『煉獄』の合わせ技だ。

『陸の型 志那都比古』は、『風の呼吸』に『岩の呼吸』構えと『炎の呼吸』の圧倒的威力を足した超高威力の飛ぶ斬撃だ。

『捌の型 武御雷』は、力任せの技だが割りと『滝壺』に似ていたりもする。

『玖の型 月読』は、『月の呼吸』なるものに『風の呼吸』と『雷の呼吸』を合わせたらしいが、そもそも『月の呼吸』の使い手を誰一人として知らないのでは何とも言えない。

『拾の型 天照』に関しては、『円舞』と『碧羅の天』の合わせ技としか言いようが無い。

『拾壹の型』は…完全に『干天の慈雨』と『飛輪陽炎』を参考に作ったみたいだ。

因みに『零の型 黄泉』と『終の型 高天原』は、流石にどの呼吸法も参考にしていないようだ。

そりゃそうだ。あんな「一生分の殺意を込めました！」って感じの殺意マシマシの型と「これが失敗したらお前の勝ちだ！」って感じの諸刃の剣の型を持つてる呼吸法なんて私は知らない。

「それで？私に『日の呼吸』を教えるって話は如何になりましたか？」

『お前が望むのであれば教えるが…どうする？』

「……………」

縁壹さんの言葉に少しの間、考え込む。

確かに縁壹さんの提案は魅力的だ。1年以上前に一度断ったとは言え、もう一度提案してくるのは今後必要になってくると言う事であらう。

しかし…歴代の柱達や天の呼吸の継承者達が誰一人として再現出来なかった始まりの呼吸にして最強の呼吸法とされている『日の呼吸』を私なんか再現できるのであろうか？それとなく聞いてみたら『不可能では無い。お前にもそれなりの才能と適正があるから完全とは行かずともある程度…4割位ならば再現出来るだろう』とか言ってた。本人が憑りつけば全盛期の8割方再現出来るらしいが代わりに私が身体を鬼化させないと身体の方が先に壊れるらしい。どんだけなんだよ日の呼吸。

しかし使えれば有利になる。使えなくとも縁壹さん指導の下、基本五つの呼吸を極める事が出来たから問題はないが…

(上弦の壹が問題なんだよねえ…)

そう。問題はそこだ。

上弦の式である私より位が上の十二鬼月最強の鬼。

『上弦の壺 黒死牟』

私がまだ鬼殺隊の柱だった頃に当時の水柱と風柱に鳴柱を加えた三人の柱を同時に相手にして返り討ちにした真正正銘の化け物だ。

柱を三人同時に相手にして勝利を収めるなんて鬼化した私でも出来ない。縁壺さんが憑りついて代わりに戦ってくれるなら話は変わるが個人の力で倒す事は多分無理だ。

しかもあの鬼は、私のご先祖様の18代目と25代目天の呼吸の継承者を殺したらしい。

私も大概だが天の呼吸の歴代継承者は皆、異常な強さを持っていた。

そんな天の呼吸の使い手を二人も倒した鬼となれば確かに今よりもずっと強くならなければならない。

縁壺さんの話によれば最後に戦った当時ですら私より強かったらしい。若干の思い出補正が入ってる可能性もあるがこの人の言う事だから本当の事なんだろう。

刀を地面に叩き付ければ地割れが起こり、刀を振り上げれば天が割れ、刀を振れば軌道上に存在する全てを斬り裂き大気が悲鳴を上げたり、無数の剣を生み出し全方向から斬り掛かって来たり、六つの目から光線を発射し口から火を吹く鬼になんて、とてもじゃないが勝てる気がしない。

刀を振って無数の斬撃を生み出すだけなら普通に『八尾比丘尼』で対処出来るが、縁壺さんが言う黒死牟って鬼に勝てる自信は無い。精々、10秒持つかどうかって所だ。

「縁壺さん！日の呼吸を教えてください!!」

なので日の呼吸を教わる事にした。

『良いだろう。少し難しいぞ?』

「望む所です!」

私の宣言に縁壺さんは少しだけ微笑みながら腰の日輪刀を抜いた。

『では、始めるぞ?』

「はい!」

その宣言と共に日の呼吸の修行が始まった。

「カァーカァー！サツサトイクゾ！」

「あい…」

その修行は鏖鴉が任務を伝えに来るまで続いた。

「那田蜘蛛山ニ向カエ！隊士達カラノ応援要請ダ！サツサトイクゾ！」

「蜘蛛…？蜘蛛!?!ヤダー!!虫は嫌だ！逃げッ…!!?き、筋肉痛！う、動けない…!?!謀ったな縁壺?!」

『お前は何を言ってるんだ？それよりも任務なのだろう？少し身体を借りるぞ』

「すまなかつたな、小次郎殿。それでは早速向かおうか」

「ナンカ変ワツタナ？マア、別ニイイカ」

『ヤダー！やめろ！は！な！せ！身体の支配権を返せ！ヤメッ、ヤメロー!!』

そしてそのまま那田蜘蛛山へ任務に向かった。



一方その頃、那田蜘蛛山にて

「累…家族を欲するのは…悪い事では無い。しかし…暴力で作られた家族は…本当の家族では…ない」

上弦の壺である黒死牟が下弦の伍である累を叱っていた。

「黒死牟さんも同じ事言うの!?!僕たちは家族としての絆で固く結ばれているんだ!?!どうしてそれを否定するの!?!」

「累…否定は…していない。ただ…もう少しだけ…他の者達の意見も…聞いた方が良いと…言ってるだけだ。お前も…無理矢理…やりたくない役割を…与えられたら…嫌であろう?」

累も反論したがド正論を突き付けられ言い淀む。

「そ、それは…そうだけど。でも母さんは、嫌がつて無いよ！そうだよね？母さん？」

累の言葉に母蜘蛛鬼は、ひっ！と短い悲鳴を上げる。

「え、えと…それは……」

「母さん？」

おどおどしていると母蜘蛛鬼を見た累が威圧的な声を掛けた。

「ヒッ！い、嫌じゃないです！全然嫌じゃないです！」

「ほらね！嫌がつてないよ！」

酷い三文芝居を見せられた気分の黒死牟は、ゆっくりと母蜘蛛鬼に近づく。

「ひ、ヒッ！！」

下弦の伍であり自分を家族ごっこに付き合わせている累と比べる事も烏滸がましいとすら感じる圧倒的な威圧感を放つ黒死牟を前に母蜘蛛鬼は、腰を抜かし無様に後退るが黒死牟はその歩みを止める事は無い

「落ち着け…何もしない」

「ひゃい！？」

出来る限り優しく声を掛けて母蜘蛛鬼を落ち着かせようとするが圧倒的な威圧感の前ではその言葉も意味を持たない。

「……………落ち着け…何も怖くない…落ち着け…」

「えっ……………？」

「なっ!?黒死牟さん!？」

「嘘っ…!？」

「ひゅ〜！お熱いね〜！」

言葉が意味を持たないと理解した黒死牟は、屈んで片膝を着いた状態で母蜘蛛鬼の右手を握りながらそつと抱きしめた。

その行動に一家がそれぞれの反応を見せた。

母蜘蛛鬼は、何が起きているか理解出来ず戸惑い、累と姉蜘蛛鬼は単純に驚き兄蜘蛛鬼は二人を揶揄うように口笛を吹いた。

「安心しろ…私が付いてる…嫌なら嫌と…言えば良い…我慢する必要

は…無い」

黒死牟の天然タラシが発動した！

「…は、はひい」

母蜘蛛鬼は魅了された！

「か、母さん…！」

累は嫉妬している！

「累…そう言う訳だ」キリツ！

「いや、如何言う訳だよ。人妻寝とっただけじゃねえか」

「……………」

黒死牟の台詞に累の鋭いツツコミが炸裂して黒死牟は押し黙った。

そのままとん拍子で話が進み、

「では、これからよろしくお願いしますね？兄上」

「…まあ、いいだろう」

黒死牟が累の兄に成った（縁壹さん嫉妬案件）。

そして那田蜘蛛山は、原作よりも遥かに鬼畜仕様になったのである。

第九話

那田蜘蛛山へ移動中の輪廻（主導権・縁壺）が輪廻（精神体）の頼みで道中の酒屋で純米大吟醸に区別される酒の中でも度数の高い物を選び、同時に紅漆の盃を二つ購入してから任務をへ向かった。

「輪廻。なぜ酒を購入したのだ？」

『那田蜘蛛山：つまり、く：く、くつ、くつ！蜘蛛！…はあはあはあ…の居るところに行くんでしょ？飲まないとやってられないわよ』

縁壺の疑問に輪廻は半ば自棄になりながら答えた。

「そうか…では、なぜ盃を二つも購入したのだ？お前は独り身であるう？」

『うぐつ!!?』

縁壺の一切遠慮の無い素朴な疑問が輪廻の心を深く抉った。

『ほ、ほら…誰か男性の隊士を助けることが出来れば一緒にお酒を飲んで…えーと、いい関係が築けるかな…』

「ありえない事だな。期待するだけ無意味だと思う」

質問をされた輪廻は、若干の誤魔化しを入れながら答えたが縁壺にあり得ないとバツサリ斬り捨てられた。

『うっさい！まだ分かんないでしょ?!いい関係が築けなくても既成事実を作ったら私の勝ちなのよ！そのためにもお酒が必要なのよ！』

「輪廻…お前の肉体は、鬼の者だ。人の子を孕むことなど出来るとは到底思えないぞ？」

今度は本当の目的を教えた輪廻だったがまたもや縁壺にありえないと一蹴された。

『知ってるわよ！それくらい知ってるわよ！でも、私も女としての幸せを掴みたいのよ！私が気に入った男達はみんな死んじやうか隠になるような腑抜けばかりだし！私よりも強い男なんていないし！それなら私好みに育てようと思ったら他の娘といい感じになってるし！邪魔できるわけないじゃないですか?!さびまことか！ぎゆしのか！さねカナとか！最高に可愛いじゃないですか！あの中に入るほど私は屑じゃありませんよ！どっちかと言えば応援する側ですよ！』

他にも育てようとしたけど、全員が向けてくるのは好意の視線ではなく尊敬の眼差しなんですよ！誰一人としてこの私のような行き遅れに手を出さないんですよ！夜這いを掛ける勇気を持った男性隊士なんて誰一人として居なかったんですよ！私は！ただ！女として幸せになりたいんだ!!」

「そうか…まあ、良い男が見つかるといいな。那田^{目的}蜘蛛山^地が見えて来たからそろそろ肉体の主導権を返すぞ。くれぐれも逃げるなよ？」

本音をぶちまけた輪廻に対し縁壹は、ひたすら走りながら何も答えずに身体の主導権を返す準備をした。

「ふう…落ち着け落ち着け。私は元柱…たかが蜘蛛なんかには怖がっていたら他の隊士達に示しが付かなくなる。落ち着け私…落ち着け天空時…落ち着け元天柱…私はもう人間じゃない。今の私は鬼よ。全ての鬼の中でも上から三番目に強い上弦の式よ…たかが蜘蛛如きに怖がってたら上弦の鬼としても鬼殺隊の柱、そして何より天の呼吸の継承者としての名折れよ。ふうふうふう…。。。。。。よし！覚悟完了!!」

一人で精神統一をしながら覚悟を決めた輪廻、改めて天空時 輪は狐のお面を深くしっかりと被ってから入山した。

「輪廻。那田蜘蛛山ハ、アツチダ。コツチハ、極普通ノ山ダゾ」

「そ、そうでしたっけ？お、覚えてないな」

「トボケルナ。サツサトアツチニ行クゾ」

「分かりました…分かりましたから頭を突かないで下さい」

そしてすぐに鴉に叱られて本物の那田蜘蛛山に向かってやっと入山した。

く移動く

那田蜘蛛山にて

「ここが那田蜘蛛山…全然蜘蛛が居ないわね」

「ココカラ隊士達ノ応援要請ガアツタ。報セニヨルト十二鬼月ト思ワレル鬼ガ出現シタトノ事ダ。ダカラ才前ニ報セタ。才前ナラ大抵ノ

鬼ヲ殲滅出来ルダロウ？元天柱殿」

「小次郎さん…知ってたんですか？」

担当鎧鴉である小次郎の言葉に輪廻は仮面の内側で軽く目を開きながら驚いた様子で顔を向けた。

「俺ヲ嘗メテ貰ツチャ困ル。十年近クモ才前ノ鎧鴉ヲヤツテイタンダ。主人ノ気配クライ覚エルサ」

「小次郎さん。鬼に成った私の事を覚えていて下さってありがとうございます。ございます。改めてこれからもよろしくお願いします」

「コチラコソヨロシクナ。サテ、サツサト入レ。隊士達ノ様子ガオカシイトノ報セダ、キツトコノ山ニ居ル鬼ノ仕業ダロウ：遠慮セズ二行ケ」

「はいはい…」

担当鎧鴉との会話もそこそこに輪廻は、軽い足取りで那田蜘蛛山に入山した。

『輪廻。この山の中から不思議と懐かしい気配がする。申し訳ないが気配のする方に向かわせて貰う。安心しろ。お前はかなり強い。そう簡単に負ける事はない。万が一の場合は私が助けるから安心しろ』
入山した直後、縁壺が言うだけ言って何処かへと消えてしまった。

「あつ、行ってらっしやい…」

輪廻は、それを見送る事しか出来なかった。



産屋敷邸

鬼殺隊の本部であり鬼殺隊の最高管理者、即ち鬼殺隊当主である産屋敷家の者が住む場所。

その在りかは、秘匿されており周囲に鬼の苦手とする藤の花が咲き乱れる土地に在る事だけが分かっている。

この産屋敷邸で顔の上半分が爛れた一人の若い男性が座っている。

この男こそ第97代目当主の産屋敷輝哉である。

当代の当主である産屋敷輝哉が膝元で息を切らしながら報告を済ませた一羽の鎧鴉を優しく撫でながら口を開いた。

「そうか…那田蜘蛛山で私の子供たちが何人もやられたのか。十二鬼月が居るかもしれないから階級の高い子たちを向かわせたんだけど…なるほど。輪廻、いや輪さんが向かってくれたから大丈夫かもしれないけど…何故か凄く悪い予感がする。これは、柱を向かわせるしかないかな?」

そう呟きながら後ろをゆっくり振り向く。

「行ってくれるかな? 錆兎、カナエ」

その視線の先には右頬に裂傷のある灰色の髪をした水柱の男性、鱗滝 錆兎と黒く美しい長髪を蝶の髪飾り二つで纏めた女性、花柱 胡蝶カナエ。

両者ともに本来あるべき歴史とは違い生き延びた鬼殺隊の最高戦力の柱である。

「御意」

産屋敷の言葉に柱の二人が同時に了承し頭を下げた。

「錆兎くん、輪さんが生きてるんだって。会ってみたいと思わない?」

「眉唾物だろう。それに所詮は噂だ。信憑性が皆無だ。」

カナエの質問に錆兎は、ただの噂だと否定した。

「だが…」

しかし続けて口を開いた。

「もし本当に生きているなら会ってお礼が言いたい。義勇を元気付けてくれた事や真菰と一緒にさせてくれた事。あとは…他にもいっぱい有るな」

「それなら後でお礼を言うためにも会わないといけないわね。ちょうど義勇くんとしてのぶの事で相談したい事があったのよ!」

「その件について俺も聞きたい事がある…あの二人と一緒に居ると何故か嬉しそうな匂いがするんだ。理由を聞いたなら輪さんのお陰だと言わないからな。色々聞いてみたい」

二人で話ながら襖を開けて産屋敷邸から出て行き那田蜘蛛山に向かう準備を始めた。

「輪さん…まだ生きておられてたんですね」

『ご安心下さい若様。私は、貴方より先に死ぬつもりはありませんよ。はい、指切りしましょう?』

『輪さん…約束ですよ?』

『いいですよ。指切りげんまん嘘吐いたら針千本飲みます!指切った!若様も勝手に死んだらダメですよ?』

『分かってます…』

『私は約束を守っています。今度は貴女が約束を守る番です』

◆ 夜空に浮かぶ月を見ながら産屋敷お輝哉様は小さく呟いた。

那田蜘蛛山の母蜘蛛鬼が待機している場所で甲の隊士2人と乙の隊士1人が上弦の壺である黒死牟と刀を構えた状態で向かい合っていた。

既に戦闘が始まってから3分以上経ち、三人とも満身創痍ではあるが目の前の圧倒的強者を相手にしても、その闘志は一切衰えていなかった。

「はあ…はあ…下弦の伍だけならまだしも、何故上弦の月が居るんだ?!」

「知るか!それよりも他の隊士達が逃げるだけの時間を稼ぐぞ!」

「それなら俺に合わせる!炎の呼吸 伍の型 炎虎!」

三人の会話もそこそこに炎の呼吸を扱う甲の隊士が斬りかかった。

「あつ、待て!水の呼吸 肆の型 打ち潮!」

「勝手に動いてんじやねえ!風の呼吸 参の型 晴嵐風樹!」

「ふむ…」

しかし黒死牟は、腰に帯刀してある刀を一振りするだけでその攻撃を真正面から打ち破った。

「ぐあつ!!」

「がはっ!ぐっ…うぐう!」

同時攻撃を打ち破られた三人の隊士達のうち二人は、地面に転がされ一人は生えていた大木に背中を強く打ち付けて肺の空気を一気に吐き出してしまった。

「貴様らは…中々強い…私を相手に…三分持った相手は…実に58年

振りだ。誇りに思え…しかも本当に…下級隊士達を…逃がす時間を…稼ぐなど…あつぱれだ！」

ほぼ戦闘不能の隊士達を前に一切の隙を見せずに立っている黒死牟は、手放しに称賛した。

そして続けてある提案をする。

「貴様ら…全員…鬼に成ってみないか？」

「…っ!？」

その言葉に三人の隊士達は、驚愕の表情を浮かべたがすぐに口を開く。

「ほぎけ…六つ目野郎！」

「鬼に堕ちるくらいなら…今この場で腹を搔っ捌いて、自分の首を刎ねるわ!!」

「俺達は、鬼殺隊に入った瞬間、鬼と戦って死ぬ覚悟を決めた！全ての鬼の中でも最強の上弦の壱と戦って仲間を逃がし死ねるなら本望！」

三人とも鬼に成らないと宣言した。

「そうか…残念だ。非常に…残念だ」

その宣言を聞いた黒死牟は、心底残念そうに頷いてから刀を構えた。

「ならせめて…武士らしく…相手してやろう」

三人の不屈の闘志と覚悟に敬意を表し月の呼吸を使って相手する。

「そいつあ…嬉しいねえ！」

「最強の鬼が本気で相手してくれんだ…俺の人生も捨てたもんじゃねえな！」

「我が人生に…一片の悔い無し！」

三人の隊士も息を切らしながら何とか立ち上がり日輪刀を構えて、黒死牟の元へと一斉に斬り掛かった。

「炎の呼吸 玖の型 煉獄！」

「水の呼吸 拾の型 生生流転！」

「風の呼吸 捌の型 初裂風斬！」

三人の隊士が放てる最強の一撃を前に黒死牟は、少しだけ微笑んでから刀を振るった。

「素晴らしい…月の呼吸 拾肆の型 兇変・天満織月」

黒死牟が刀を振ると同時に広範囲に無数の斬撃を縦横無尽に放ち、三人の隊士達の技を楽々と打ち破り三人の命を同時に奪った。

「中々の…使い手だった…お前は…この者達より…強いのだろうか…輪廻よ」

「さあ、どうでしょうね？」

三人の鬼殺隊士達の命を奪った黒死牟が帯刀しながら振り向くと、すぐ後ろに母蜘蛛鬼を一瞬で始末した狐の仮面を被った輪廻が立っていた。

「まあ…堅苦しい話は後にして一杯付き合ってくださいませんか？どうせ死ぬなら十二鬼月最強の貴方と一対一で飲んでから戦って死にたいですわね」

「貴様…戯けているのか？」

輪廻の誘いを受けた黒死牟は、刀を抜き放ち切っ先を輪廻の頸に当てるが当の本人は至って真面目に言葉を続けた。

「戯けていません、割と本気です。どうせ死ぬなら悔い無く死にたいです。ほら、ちょうど良い椅子やお酒と盃もありますし一杯付き合ってくださいよ」

そのまま母蜘蛛鬼が座っていた岩の上半分を日輪刀で斬り落とし、平らな切断面に座って黒死牟を手招きした。

「貴様…「それとも…」…？」

「武士の癖に女とお酒も飲めないんですか？もしそうだったら謝るわ。ごめんなさい」

「……つつつつ!!!」

一向に誘いに乗らない理由を考えた輪廻の煽りは、黒死牟のプライドを強く刺激した。

「良いだろう…付き合ってやる」

プライドを強く刺激された黒死牟は、輪廻の真正面に座って酒がなみなみ注がれた盃を受け取った。

「じゃあ…乾杯」

「ふん…」

こうして上弦の鬼同士の世にも奇妙な飲み会が始まった。

第十話

「…乾杯」

「ふん…」

私が手に持つ酒の入った盃を持ち上げると上弦の壺である黒死牟も盃を持ち上げた。

酒の席でこの行為は、始まりを意味する…らしい。

取り敢えず飲み会(?)が始まったので狐のお面を外し盃を傾けて酒を少しだけ口に含める。

水のように透き通った清酒を口の中で味わう。

果物とは一味違う米特有の甘味。鼻腔を刺激する酒特有の香り。

そして喉に流し込むと同時に感じる清酒のコクと喉の奥を刺激するような辛味。

最後に胃から身体全体に広がる心地良い熱さ。体の内側から熱を発して行き、その熱が脳天まで到達してから一つ息を吐く。

「ふう…」

美味い。

この一言に尽きる。

お酒に詳しい人やお酒の味を知っている人だったら、もつと気の利いた感想を残せるだろうが生憎私はそこまで詳しくない。

柱時代に月を観ながらお酒を飲むか、柱合会議の後で他の柱達にお酌して貰いながら飲んだのが精々だ。

それも月に一度あるかないか程度の周期ペースで飲み、出張任務の終わりにその土地の酒場に行つて嗜む程度に飲んでいたが昔の話だ。

「ふむ…悪くない…」

「そうですか?それは良かった」

黒死牟さんの眩きに反応して答えた。

「……………」

黒死牟さんがこちらを一瞥してから盃に残っていた酒を全て喉に流し込み口を開く。

「それで…貴様の…目的は…なんだ?」

「目的ねえ…」

目的と聞かれても正直返答に困る。

死ぬ前にやりたい事がいっぱいあるし出来れば結婚もしたい。

結婚して妊娠して子供を産んで幸せな家庭を築きたい。

他には、？ぷりんあらもーど？とか言うハイカラな食べ物も食べてみたいし若様…じゃなかった。お館様と久しぶりにお茶を飲みながら楽しく談笑したい。後は…

「貴様はなぜ…鬼でありながら…鬼狩りの…味方をする？」

死ぬ前にやりたい事を考えていたらもう一度を質問してきた。今度の質問は、なぜ鬼でありながら鬼狩り…即ち鬼殺隊の味方をするかを聞いて来た。

「何故って言われてもねえ…私が鬼殺隊の元柱だったから？とかじゃあ駄目かな？」

「それが…理由では…無いだろ？…本当の…理由は…なんだ？」

元柱だから…確かにこれが理由とは思えない。説明できないが体の内側で何か違和感を感じる。

うーん、理由？

そう言えば私が鬼殺隊に入った理由ってなんだっけ？

確か…猗塙座を自分の手で倒す事だったけど今となってはその目的も達成された。

じゃあ柱だった頃に決めた目標は？変わらず猗塙座を倒す事だ。

それが終わったら何をしようとしていたんだっけ？確か…結婚したかった。

結婚する理由は？普通に女としての幸せを得るため。だが…果たして女としての幸せはそれだけか？他にももつとあるだろう。

じゃあ今の私が鬼殺隊に味方する理由は？縁壺さんに協力するため…じゃないし、鬼を皆殺しにするため？でもない。

理由、理由…理由。そうだ！思い出した！私が鬼殺隊に味方する理由は…

「私を鬼にした全ての鬼の首魁である鬼無辻 無惨の頸をこの手で撥ねるためかしら？」

「ほう？せつかく…鬼に…成れた…のにか？」

私の答えに黒死牟さんが見当違いの質問をしてくる。

その質問に対して内心笑いながら空になった盃に酒瓶から酒を注ぎ足した。

「せつかく鬼に成れたく、とか言ってますけど、私は別に成りたくて鬼に成った訳じゃないですからね？鬼無辻に無理矢理血を注入されて強制的に上弦の式に成っただけだから、あいつに忠誠を誓う気も従う理由や協力する理由が一切見当たりません。殺すべき理由は、すぐに見つかりましたけど」

「……」

一呼吸でそこまで言い切ると黒死牟さんが六つの目を開いて驚愕の表情を浮かべていた。

その表情を酒の肴に新たに注ぎ足した酒を一気に煽る。

やっぱり自分より上の者や強者の驚いた顔を肴にして飲む酒は格別に美味しい。

10年位前に槇寿郎さんに「相手を見下し泣かせて絶望させてから、その表情を酒の肴にする奴より質が悪い」って言われたけど相手は鬼だ。遠慮無く酒の肴にさせて貰おう。

「無理矢理…だと？」

まるで有り得ない事を聞いたように戸惑いを隠せない黒死牟さん。

「ええ、そうですよ。あれ？もしかして…」

「自分から進んで鬼に成ったんですか？」

「…っ!!」

私の質問に唇をギリイと噛み締め僅かに口から血を垂らした。

（ああ、その表情も堪らなく愛おしい。自分が長い間積み上げて来た物を別のヤツにあっさりとかかれたと理解した時の表情…更に追い詰めに追い詰めて私だけに依存させたい。私なしで生きられない状態にしてやりたい）

「それで？…どうなんですか？」

思考が完全に暴走する前に空の盃に酒を注ぎながらも一度質問を投げかけた。

「私は……自分の意志で……鬼に成った……全ては……弟を……縁壺を……超えるため……。そのために……地位を……名誉を……家族を……仲間を……全て捨てた」

「それで？ 超えられたんですか？ 己の技以外を全て捨ててまで貴方の弟を超えられたんですか？」

苦悶の表情を浮かべて自分が捨てた物を語った。その上でさらに質問した。

「……………無理だった」

「へえ……？」

予想通りの答えに納得も驚きもせず、興味がないような反応を示した。

こうすれば相手が勝手に続きを話すと天元くんに教わった。まさか上弦の壺を相手に使うなんて思わなかった。

そして案の定、聞いてもない事をベラベラと語り始めた。

「私と縁壺は……双子だった……武家の家系に……双子が生まれると……縁起が悪い……特に縁壺は……生まれつき……額に炎のような……痣があった……縁壺はそれで……忌み子として……扱われた。……父は縁壺を……殺そうとしたが……母が猛反対した。結局……十歳になったら……寺に出す……という条件で……生きる事を許された。その後は……物置のような……三畳の部屋で……軟禁生活を……送っていた。私はそれを……哀れんで双六や……凧揚げ等の……遊びを教え……手作りの笛を作った。それが父に気づかれ……頬を殴られた。さらにそれが原因で……父と母が喧嘩した……だが我ら兄弟の……交流は続いた。そしてある日……私の剣の指南役だった男が……戯れで縁壺を……稽古に誘った。私は止めようとした。私ですら……今まで一太刀も……浴びせる事が出来なかったからだ。しかし縁壺は……いとも簡単に指南役の男を……目に見えぬ速度の……攻撃で三太刀食らわせた。その出来事をキツカケに……我々の立場が……逆転した。私は物置小屋のような部屋に……閉じ込められ……縁壺は私が今まで……受けていた待遇を受けた。それからしばらくして……母が病で死んだ。これを契機に……縁壺は継国家を去った。しかし去る直前……「いただきますこの笛を兄上だと思い、それだけ離れていても挫けず、日々精進致

します」と言つて……何処かへと立ち去つた。それ以降……私の前に現れなかつた」

そこで一旦話すのを止めて盃を傾け酒を煽る。

「それでそれで？その後はどうなつたんですか？」

「うむ……」

中身が少なくなつてきた酒瓶から酒を注ぎながら続きを話すように促すと、一つ頷き酒を一口だけ飲んでから口を開き説明を続ける。

「その後……私は成長し……家督を継ぎ……立派な武将として……戦場で華々しい……戦果を築いた。しかし……私の率いる部下……たちは一匹の鬼を……相手に全滅した。そこで私を助けたのが……鬼狩り、鬼殺隊に入つた……縁壺だつた。思いも依らぬ……再開だつた。鬼を狩る術すべを持つた……鬼狩りの力を得るため……私も鬼殺隊に入つた。そこで縁壺に呼吸法を……教わり柱にまで……登り詰めた。私と縁壺は……鬼殺隊士として活躍した。向かう所敵なしだつた……痣を発現し……透き通る世界にも入門した……。『天の呼吸』を作つた男にも……修行を付けた。……だが痣が発現した代償として……25歳までしか生きられないと……知つた私は絶望し同時に考え始めた。「このまま私の剣の道を途絶えさせて良いのか？このままでは私は何も残せず死んでしまつてもいいのだろうか？縁壺に全く近づけずに死んでしまふ」そう考えたら……何もかもがどうしても良くなつた。その時期に無惨様に出会つた……無惨様は……私に鬼に成れば……悠久の時を生き……無限の時間を使い……修行が出来る……と……言つて下さつた。そうすればいつの日か……縁壺を超えられる……と思つた……私はそれを受け入れ……鬼に成つた……鬼に成つてから……修行を続けさらなる力を得た。自分でも……自覚出来る程に……強くなつた……そう思つていた」

「思つてた？」

「ああ……ある赤い月の夜だつた。信じられぬ物を見た。 齡よわい八十を超す枯れ木のような老体。それでも尚……全盛期以上の覇気を纏つてゐる縁壺に出会つた。私は一切油断せず……殺す気で刀を構えていた……が、一瞬で頸を斬られた。瞬時に後退出来なければ……完全に負けていた。あと一太刀……追撃が入つたら……私の負けだつた……だが丁度その

時：縁壺は寿命を迎えて死んだ。結局一度も：縁壺に勝てないまま
：終わった。縁壺の亡骸を斬った：脆かった。死んだ男に勝っても
：なんの意味も無い：何一つ縁壺に勝てず：我々の勝負は終わった。
私は：何も残せなかった：縁壺は：己の想いと意志を残し：初代天
柱は：己の技術を残した：私は：全てを捨てても：あいつのようにな
れなかった：私はただ：あいつを：縁壺を：越えたかった。：い
や：少し違う：私は：縁壺：お前に成りたかったんだ」

黒死牟さんが離し終えるのを待ってから、盃を傾け残っていた酒を
飲み干して口を開いた。

「黒死牟さん：貴方の行動は、捨てたじゃなくて逃げたって言うんで
すよ？」

「何：？」

私の言葉に黒死牟が睨みながら盃を置いた。

「だってそうでしょう？努力しても埋められない差があるなら更に努力
すれば良いだけ。貴方の弟は自分よりも才能があった、けど貴方はそ
れを才能の差として諦めた。痣が発現する代償も克服不可能なら潔
く諦めて私のご先祖様みたいに自分の技術を、剣技を後世に残すため
何冊もの書物を書き残し己の持つ知識、技術、剣技、全てを残し私の
代まで繋がりました。弟の方が才能があると言いましたがそれは私
も同じです。私も弟の方が天の呼吸への適正が高かったです。です
が努力でそれを補って、正式な天の呼吸の35代目継承者になりました。
努力は実を結ぶって言葉知ってますか？努力すれば必死に努力
すればいつの日かそれが為になるって意味ですよ。貴方も努力をし
たかも知れません。だけど努力が足りなかったって事ですよ。時間
が無いなら無いなりに工夫して何かを残せばよかったのではないで
しょうか？まあ、何よりも…」

ひたすら持論を語り終えて酒瓶の中身を全て盃に入れてから黒死
牟さんを指差す。

「ねえ黒死牟さん。貴方：……長男の癖に我慢出来なかったんですか
？」

「つつっ!!？」

煽りを含めた質問を投げかけた瞬間、私の盃を持つ右腕が斬り飛ばされた。

人間態で斬り飛ばされた右手の盃から酒が地面に零れて地面に染み込む。

「結構痛いですね…」

「抜け…」

「は？」

「刀を抜けと言っている！」

隊服で右腕を圧迫止血していると幾つもの目の模様が入った刀を私の顔の前に突き出した。

「断ったら？」

「このまま殺す。だが…せめて剣士として…敬意を表し…殺してやる」

「そうですか…血気術解除」

黒死牟さんの言葉に頷き血気術を解除し上弦の式に戻って斬られた右腕を生やす。

（鬼殺隊士として上弦の壱との殺し合い…それとも上弦同士として殺し合い。どちらを取るべきか？こいつは、黒死牟、隊士達を殺したから私には鬼殺隊士として戦う建前がある。はあ、やれやれ…とんだ貧乏くじを引いてしまったわ。今ここで逃げたら元柱としても天の呼吸継承者としても恥。人生最大級の恥。お館様やお爺様、弟連にも面目が立たない。それは他の子たち隊士に対しても同じ事）

「はあ、つ、本当！最悪!!あんたの勝負受けるしか無いじゃない！いいわよ…」

少し考え事をしてから腰に帯刀してある日輪刀を二本とも抜いて構える。

「天の呼吸 35代目継承者、そして元天柱として…お相手願います。天空時 輪！参る!!」

「黒死牟…参る！」

名乗ると同時に黒死牟に斬り掛かる。

瞬間、胸に激痛が走った。

第十一話

「参るー！」

そう言つて黒死牟に斬り掛かった直後、胸に激痛が走った。

「クツ…!？」

何事かと思ひ数歩下がって胸元を見ると刀で斬られたような裂傷が再生し始めていた。

どうやら目に見えない速度で刀を振り私の胸に傷をつけたようだ。

(危なかった…もし上弦の式の肉体じゃなかったら確実に殺されていた。これが上弦の壺…十二鬼月最強の鬼の実力。正直嘗めてたわ…)

心の中で呟きながら再び二振りの刀を構える。

(こいつを相手に手加減は一切不要。一瞬でも油断したら確実に負ける…常に気を張って戦いに挑まなくてはならないわね。縁壺さんとの模擬戦以上に集中しないと…)

「ふう…」

一つ息を吐き両手の日輪刀を強く握り締める。

「参る!!」

言うが速いか二振りの日輪刀を同時に振るい黒死牟に斬り掛かる。

今度は先程と違い反撃の一太刀を右手に持った日輪刀で防いだ。

「ほう…?」

黒死牟が関心している隙を狙って左手に持った日輪刀を振るうが右手の日輪刀を弾いた刀で左手の刀を弾いた。

ならばと右手の日輪刀逆手に持ち左回転を加えながら斬り掛かる。

「天の呼吸 壺の型・改 天輪 無間！」

「むっ…!」

黒死牟の頸を狙った一刀目の軌道を読まれ避けられたが勢いを付けたままの回転で左手の日輪刀も連続で使つて斬り掛かる。

一度避けられたら二度。二度避けられたら三度。三度避けられたら四度。躲されるのであれば相手に当たるまで何度も何度も攻撃すれば良いだけ。

それが「天の呼吸 壺の型・改 天輪 無間」

縁壹さんとの修行で身に着けた『天の呼吸 壺の型 天輪』から派生させた新たな技。

鬼の肉体だからこそ出来る究極の無茶。この技を普通の人間が使おうとしたら高確率で失敗して大きな隙を晒すことになる。

この技の一番の特徴は、相手に反撃する隙を与えず途切れることの無い怒涛の連続攻撃。縁壹さんによると『この技を防げる者は、恐らく片手で数えられる程度だろう』との事だ。

ただし弱点もある。

それは…

「ふんっ！」

「うあっ…い！」

回転速度以上の速度で攻撃の隙間を縫い反撃されると踏ん張りが効かないこちらとしては、大きな隙を晒すことになる。

案の定、連撃の合間を縫って反撃を成功させた黒死牟の刀が地面に転がされた私の頸を狙うように振り下ろされる。

その攻撃を地面をゴロゴロ転がり紙一重で躲して先程の椅子代わりにしていた岩の近くまで移動し跳び上がるように立ち上がる。

「ふう…い…ふう…い！」

「…」

連続攻撃を防がれた上に殺されかけ息を切らす私と違い、黒死牟は六つの目で静かにこちらを見つめている。

「はあっ！」

今度は鬼の身体能力を活かし一気に近付き、人間には到底不可能な速度で日輪刀を連続で振る。

一 太刀目：防がれる。

二 太刀目：防がれる。

三、四、五 太刀目：防がれる。

十 太刀目：防がれる。

速度を上げる。

二十、三十、四十、五十 太刀目…全て防がれる。

さらに速度を上げて日輪刀を振る。

百、二百、三百、四百、五百……千。

全て防がれる。

やがて日輪刀を振った回数の方を超えた頃。

遂にそれが起こった。

バキンッ！

「はっ…えっ!?!」

刀を酷使し過ぎたせいで金属疲労により右手に持っていた日輪刀の刀身が折れた。

「月の呼吸 式の型——」

その僅かな隙を突くように黒死牟が刀の向きを変えて斬り上げの構えを取る。

「チッ！」

「朱華ノ弄月」

その一刀を防ぐ為に折れて空中に飛んでいた日輪刀の刀身の鎬を黒死牟の刀ごと右足で踏みつけて技を発動を防ぐ。

「なにつ…!?!」

私の予想外の行動に黒死牟が一瞬だけ六つの目を見開いたが、すぐに落ち着きを取り戻しもう一度刀を振った。

「月の呼吸 陸の型 常夜孤月・無間」

「天の呼吸 伍の型 八尾比丘尼」

刀を一振りするだけで無数の斬撃が縦横無尽に放たれたが、その悉くを絶対防御の八尾比丘尼で防ぐ。

斬撃を全て防いだが近接戦を不利と考え、残された一本の日輪刀を高く持ち上げる。

「天の呼吸 陸の型・改 志那都比古 神風」

お返しとばかりに日輪刀を高速で振り竜巻の様に回転し相手を切り刻む飛ぶ斬撃を四つ生み出す。

それと同時に力強く踏み込み黒死牟に日輪刀の切っ先を向けて突ききの構えを取る。

「月の呼吸 参の型 忌月・銷り」

「嘘…でしよ？」

有ろう事か四つの飛ぶ斬撃を一瞬で相殺して私の呼吸に合わせてあちらも切っ先を突き出して来た。

「天の呼吸 漆の型 毘沙門天！」

「はっ！」

上弦の鬼同士の全集中の呼吸を使った全力の一突きの衝突で周囲に鉄がぶつかり合う甲高い音が響く。

技が衝突した衝撃でお互いに後方へと跳んだ。

「ふむ…貴様…中々強いな」

「チツ！随分と余裕そうね」

こちらは最初から全力で戦っているのに、あちらはまだまだ余裕が感じられる。

まさかここまで実力差があつたとは思ひもしなかった。

だけど…

（縁吉さんに比べれば大した事無い。いや、あの人が可笑しいだけか…）

心の内で自嘲気味に呟きながら日輪刀を鞘に仕舞う。

「貴様…勝負を捨てたか？」

私の行動に黒死牟が眉を顰める。

「勝手に変な解釈しないでくれませんか？今からちよつとした面白い物を見せるので期待してて下さい」

「ほう…？面白いものか…ならばこちらも…何か見せなければ…不作法というもの…」

私の言葉に黒死牟が少しだけ微笑んで刀を幾つにも枝分かれした見た事ない物に変化させた。

「ふう…」

刀を構える黒死牟に対し私は自分の日輪刀を地面に突き刺す。

「いざ、参るー！」

そのまま徒手空拳で黒死牟の下に走った。

（何を考えている？）

「月の呼吸 漆の型 厄鏡・月映え」

黒死牟が疑問に思いながらも地面を斬り裂きながら突き進む斬撃を飛ばす。

「チイツ!!」

自分に迫る斬撃を両腕で何とか防ごうとするが、防ぎ切れず両腕と両脚に裂傷が走り血が地面に飛び散る。

「ハアツ!!」

傷を修復させながら黒死牟に飛び蹴りを食らわせるふりをして股下を滑り抜けて後ろ側に回り込む。

更に立ち上がる勢いで黒死牟の後ろ髪を掴んで力の限り引っ張りバランスを崩させる。

「なっ…い…ぐっ!」

しかしやはり十二鬼月最強の鬼、肉体に力を入れて持ち堪え瞬時に立ち上がった。

「貴様!」

「水の呼吸 壺の型 水面斬り!」

案の定こちらを振り向いたので、それに合わせて先ほど殺された隊士の日輪刀を使って黒死牟の頸を狙うが簡単に防がれる。

「効かん!月の呼吸 捌の型 月龍円尾」

「クツ!グウツ!」

お返しとばかりに返って来た斬撃を後ろに跳んで躲すが思った以上に射程距離が長く射程内にあった左脚が斬り飛ばされ右脚と肩に裂傷が走り周囲の木々や草むらに血が飛び散る。

「さすがと言うべきか…何と言うべきか。信じられないほどの人外染みた攻撃ね」

「ふむ…褒め言葉として…受け取って置こう」

「皮肉のつもりで言ったんだけど…」

片足立ちで左脚が再生するまで待ちながら水の呼吸の剣士の日輪刀を握る。

(日輪刀の色は藍色…水の呼吸で間違いないわね。これから使う型との相性は最悪だけど幸い、日輪刀があと二本残って…ん?いや、全然幸いじゃないわ。隊士が死んだのよ?なんで幸いって考え方が出来

るの？やっぱり思考が鬼に近づいているのね…早く決着を付けない
と思考が完全に鬼化してしまう。縁壺さんも何処に行ったのよ。
さつきから救難信号を出してるのに一切返事が無いし…)

「ふう…ホント最悪ね」

思考の変化に焦りながら完全に再生した左脚と右脚に力を込めて
腰を深く落とし左脚を後ろに右脚を軽く曲げる構えを取る。

さらに両目に意識を集中させて透き通る世界の精度を上げる。

それに呼応するように左頬の痣が広がり色も濃くなっていく。

「むっ…それは…まさか!？」

「天の呼吸 肆の型・改 神速・伊邪那岐 百捌連!!」

私の動きに気づいたようだがもう遅い。

人間の時ですら目にも止まらない速度での高速斬撃、それが鬼化し
て速度が上がり更に108回も頸を狙って斬る。

普通の鬼なら一太刀目で頸を飛ばせるし上弦の肆の半天狗ですら
この型で倒せた。だけど黒死牟の場合は、108回でも足りないと思
う。

「やはり…半天狗を…仕留めた技か」

残像が生まれる速度で頸を狙って攻撃しているはずなのに、その悉
くを刀一本で防がれる。

「月の呼吸 拾肆の型 兇変・天満織月」

さらに反撃して来る余裕まで持っているのか何処からでも対処出
来るように三人の隊士を相手に放った全方向への超広範囲の斬撃を
放ちこちらの攻撃を防ぐ始末。

「痛っ！マズイわね…かなりマズイわ」

この型の特性上攻撃の軌道がどうしても直線的になってしまう。

そのせいで次の攻撃の軌道が読まれ黒死牟の飛ばす斬撃に自分か
ら突っ込む形になってしまう。

(だけど…そのおかげで準備が終わりそう。あと少し、あともう少し
だけ血を流せば…)

心の中で呟きながら斬撃の隙間を縫うように走り抜け、大小の切り
傷を大量に負いながらも108回目の斬撃が黒死牟の頸に日輪刀が

届いた。

「来た！」

が…

「流石に…反則でしょ」

肩や胸から生えた刀が頸に届いたはずの最後の一太刀を防いでいた。

「残念だったな…月の呼吸 拾の型 穿面斬・蘿月」

「ウアアアツ!!」

そして私の今までの攻撃を嘲笑うかのように円を描くような太刀筋に三日月上の斬撃が鋸の刃のこぎりのような見た事も無い攻撃で私の体を切り刻んだ。

そのまま数回地面を弾みながら椅子として使った大岩にぶつかる。

「カハツ!!…アツ、アアア…ガフツ！」

岩に叩き付けられた事で肺の空気が全て強制的に吐き出され、同時に肺が破裂し吐血する。

(だ、駄目だ…この化け物には、誰も勝てない。今まで戦って来たどの鬼とも規格が違う…童魔上弦の式や猗瑠座上弦の参、半天狗上弦の肆なんかと比べ物にならないくらい強い。も、もう逃げるしか…)

自分と相手の実力差を改めて理解させられ、敵前逃亡の文字が頭に思い浮かんだ。

「ふざけんな!!」

ちようどその時、自分の頭を地面が割れる程に強く叩き付けて気合を入れ直す。

(彼我的実力差? 圧倒的な格上? 規格外? それがどうした!! そんなあの化け物縁壱さんに比べれば鬼なんて全て三流以下! それを相手鬼に敵前逃亡を図ろうとする私はそれ以下! もはや天の呼吸の継承者や元天柱としてなんか関係なくこの道鬼殺隊を選んだ者として最低限の誇りすら失ってしまう! 鬼殺隊士に鬼からの敵前逃亡などあり得ない! いや! あつてはならない事よ!!)

「ふんっ!!」

改めて覚悟を決めて、日輪刀を自分の膝に突き刺し気合を入れ直して立ち上がる。

「お見苦しい物をお見せしました…改めて名乗らせて貰います。我、天の呼吸の35代目継承者にして鬼殺隊の元天柱、天空時 輪。本意、もとい上弦の式 輪廻と申す者」

「ほう…?」

私の改まった名乗りに黒死牟が刀を降ろしたまま感心したような声を上げた。

「改めて貴方に勝負を挑みます。受けて下さいますか?」

日輪刀の切っ先を向けて黒死牟に問うと笑みを浮かべ口を開いた。

「上弦の壺…黒死牟。その勝負…受けて立とう!!」

そう答えて変化したままの刀を構える。

「上弦の式 輪廻」

「上弦の壺 黒死牟」

二人とも刀を上段に構え、透き通る世界を発動させ、全集中の呼吸による身体強化を行い同時に踏み込む。

「参る!」



「参る!」

その宣言と共に二人が同時に駆け出し輪廻の持つ日輪刀と黒死牟の刀が真正面から衝突した。

「水の呼吸 捌の型 滝壺!」

「むう!!」

高威力の振り下ろし攻撃により赫刀化した日輪刀が黒死牟の刀をジククジク溶かしながらじわじわと浸食して行く。

「くう!! さっさと折れなさいよ! 天の呼吸 捌の型・改——」

「月の呼吸 伍の型 月魄災禍」

黒死牟の刀を折ろうとより高威力の攻撃をしようと両腕を持ち上

げた瞬間、黒死牟の放った技が輪廻の隊服と肉体を切り裂いていく。
「ガッ！グッ：グウツ!!」

歯が砕ける程に奥歯を噛み締め切り裂かれる痛みを堪えた輪廻は、血を撒き散らしながら日輪刀を叩き落す。

「武御雷 十握とつかの剣!!」

「なにつ!?クッ!」

赫刀化した日輪刀を上弦の式の筋力で振り下ろした結果、黒死牟の持つ刀を押し折り左腕を斬り飛ばす事に成功した。

「ヒヒツ：やつと入りましたね?」

「やるな…」

斬り飛ばされた腕を再生させながら日輪刀を構える輪廻に対し黒死牟も自分の刀を再生させて構える。

「天の呼吸 陸の型・改——」

「月の呼吸 玖の型——」

両者共に己の得物を持ち上げ同時に振りかぶった。

「志那都比古 神風!」

「降り月・連面」

四つの切り裂く竜巻が黒死牟に迫り、無数の複雑な軌道の三日月状の斬撃が輪廻に迫る。

「月の呼吸 拾陸の型 月虹・片割れ月」

黒死牟が刀を振って六つの斬撃を生み出し四つの竜巻を消滅させ、残る二つの斬撃を輪廻の頭上に降らせる。

「天の呼吸 参の型・改 伊邪那美 獄ノ門 牛頭馬頭!」

一方の輪廻は、無数の三日月状の斬撃と頭上から迫る斬撃を巨大な炎の渦で巻き込み相殺する。

（そろそろね…）

「水の呼吸 玖の型 水流飛沫・乱」

輪廻が手に持った日輪刀の耐久値を確認し周囲の木々を使って跳ね回る。

（なんのつもりだ?）

「月の呼吸 拾肆の型 兇変・天満織月」

一方の黒死牟は、輪廻を仕留めようと広範囲に斬撃を飛ばす。
(比較的予想通り)

「そこ！天の呼吸 弐の型 神隠し」

それらの斬撃を特殊な足捌きで躲しながら黒死牟に迫る。

「水の呼吸 陸の型 ねじれ渦！」

「くっ！月の呼吸 壱の型 闇月・宵の宮」

輪廻の放った斬撃を横薙ぎの一閃で相殺する。

バキンッ！

それと同時に輪廻の持つ日輪刀が半ばから折れた。

だがそれも予想していた輪廻は、日輪刀を持つ腕を引いて構える。

「水の呼吸 漆の型・改 雲波紋突き 飛将！」

日輪刀の鋸で落ちて来た日輪刀の刀身の折れた面を高速で叩き刀身を飛ばす。

その結果が耐久値が限界だった日輪刀の刀身の半分以上が砕けながら黒死牟に迫る。

この予想外の出来事に黒死牟が一瞬だけ反応に遅れて砕けた日輪刀の刀身に視界を阻まれ、残された日輪刀の刀身が肩に突き刺さった。

「月の呼吸 弐の型 朱華ノ弄月」

しかし黒死牟を相手にこの程度の痛みで動きを阻む事など出来るはずも無く肩に刺さった刀身を気にせず一度防がれた技を放った。

一方の輪廻は、折れた日輪刀を捨てて黒死牟に殺された隊士達が持っていた日輪刀を二本拾い呼吸法を変える。

「炎の呼吸 壱の型 不知火！風の呼吸 弐の型 爪々・科戸風！」

そして本来なら人間に絶対不可能な二種類の全集中の呼吸の同時使用を鬼の肉体で強制的に成功させ二つの技を同時に繰り出した。

「確かに…面白い物だな」

攻撃を仕掛けられた黒死牟は、その二つの剣技を刀一本で防ぎ切り技を出すべく構える。

「月の呼吸 陸の型 常夜孤月・無間」

「風の呼吸 陸の型 黒風烟嵐！炎の呼吸 肆の型 盛炎のうねり

！」

黒死牟の繰り出した技に対し輪廻が繰り出したのは、どちらも前方への攻撃に特化した型。二つの呼吸法により黒死牟の放つ斬撃を打ち破った。

「ほう……ここまで来るか……面白い！」

「何が面白いか知りませんが、さっさとくたばって下さい！」

自分の攻撃を打ち破った事を純粹に褒める黒死牟。

それを皮肉として受け取り二本の日輪刀を全力で握り締め構えを取る輪廻。

「天の呼吸 陸の型 志那都比古！」

「月の呼吸 漆の型 厄鏡・月映え」

黒死牟の放った斬撃が輪廻の飛ぶ斬撃を真つ向から打ち破った。

「天の呼吸 漆の型・改 毘沙門天 羅刹！」

だがそれも承知の上だった輪廻は、左腕を斬り飛ばされながら右腕の筋肉を極限まで引き絞り、黒死牟の胸に最高速にして最高威力の突き技を見舞った。

その攻撃が黒死牟の刀を押し折り、そのまま胸を貫通する。

「はああああ!!」

「ぬうううー！」

黒死牟の胸に日輪刀を突き刺したまま突き進む輪廻を黒死牟が自分の体から無数の刃を出す事で止めようとする。

「なんのこれしきー」

が、輪廻を止める事が出来ず赫刀化した日輪刀がさらに深々と食い込む。

輪廻を足止めする事が不可能だと知った黒死牟は、輪廻の体に自分の刀を突き刺す。

「ならば……月の呼吸 伍の型 月魄災禍」

「グガアアアアアツツツ!!クツ!!こ、の……クソ野郎がアアア!!」

刀を輪廻の体に突き刺したまま技を放った結果、輪廻の肉体を内部から切り刻み周囲に血が飛び散る。

輪廻が内部から体を切り刻まれる激痛に悶えて咆哮を上げるが左

腕を再生させて黒死牟の背中に手を回し黒死牟の着物を掴む。

「やつと…捕まえた!」

「クッ…離せ!」

輪廻の拘束から逃れようと輪廻の体から刀を引き抜いて輪廻の両腕を斬ろうと刀を持ち上げた。丁度その時、輪廻が思いにもよらない言葉を口にした。

「血気術 血鎖?縛!」

輪廻がその言葉を口にした瞬間、血気術が発動する。

周囲に飛び散った輪廻の血から無数の鎖が飛び出し黒死牟の腕や足、手に持つ刀などに巻き付き黒死牟を雁字搦めに拘束した。

「何っ!?!」

その予想だにしない血気術に黒死牟は、完全に拘束されてしまった。

周囲の木々や草むら、地面や椅子として使った岩。果ては斬り飛ばされた輪廻の腕や足からも血の鎖が伸びている。

合計50を超える血の鎖。その全てが黒死牟を拘束する為にのみ発動した。

血気術 血鎖?縛。

発動条件が一定以上の血を流した上で拘束対象に触れている事、と若干難度が高めだがその効果は絶大。

上弦の鬼ですら簡単に逃れられない程の拘束力を有する。

それに今回の拘束は50本を超える血の鎖による拘束のため上弦の壺である黒死牟ですらまともに動けずにいる。

「はあ…はあ…やつと発動出来た。貴方強すぎますよ…もうちよつと手加減してくれませんか?」

「ぐっ…クッ…外れん!?!」

拘束を解こうと藻掻く黒死牟を背に輪廻は、地面に突き刺した自分の日輪刀を回収する。

「さてと…死ぬ前に言い残したい事はありますか?」

「あまり…凶に乗るな。こんな拘束…すぐにでも!」

日輪刀を回収し抜刀の構えを取った輪廻の余裕な態度に黒死牟が

全身に力を込めて拘束から抜け出そうと奮闘する。

「アハハハッ！無理無理。その拘束を抜け出す方法は、鎖を発動させている私を倒すか鎖そのものを斬るしかありませんから。その状態の貴方には、どちらも不可能なのでさっさと諦めて下さい。ほら、頑張れ頑張れ。では…」

輪廻は、その様子を嘲笑いながら腰を深く落とし殺意を剥き出しにしてゆつくりとにじり寄るようにして黒死牟に近づく。

「天の呼吸…零の型…黄泉…」

ゆつくりと喋りながら黒死牟にゆつくりと近づいて行くその姿は、さながら死神のようだ。

『天の呼吸 零の型 黄泉』

この型は、天の呼吸で唯一『透き通る世界』に入門している事を前提条件とした奥義。

透き通る世界により殺意などを一切断ち切った状態で殺意を全開放する事で本来のあるべき姿を取り戻す型。

使用者の殺意を感じて攻撃に備えようにも使用者が透き通る世界によつて殺意を一切感じ取れない状態にあるので殺意を感じるが感じ取れないと言う矛盾したパラドクスに陥り脳が情報処理しきれない状態のうちに対象の頸を刎ねる技。

この究極の矛盾ともいえる型を成功させる為には透き通る世界を維持した状態でゆつくりと動く必要がある。

「……………」

ゆつくりと近づいて来る輪廻死神の足音に対し黒死牟は何もせずひたすらある事に集中していた。

「…やつと死を受け入れたんですね？それでは…さようなら」

「輪廻よ…」

日輪刀を抜こうとする輪廻に対して黒死牟がゆつくりと口を開く。

「なんですか？」

「貴様は…油断しすぎだ」

「はっ…」

その言葉に疑問を思ったのも束の間。

さつさと頸を刎ねようと日輪刀を抜刀した…その刹那。

「月の呼吸 拾肆の型 兇変・天満織月」

「なっ!?ウアアアッ!!」

黒死牟が背中に刀を精製してそれを髪に絡ませ髪を振り回す事で広範囲への斬撃を発生させた。

そしてその斬撃が輪廻の隊服と全ての血の鎖を一度に切り裂いた。

「嘘…でしょう?何よそれ…そんな反則技…有り?」

突如飛び出した斬撃に何とかギリギリで対応しある程度防いだものの、完全には防ぎ切れず大なり小なり全身に裂傷を負う。

「相手が…完全に死ぬまで…油断するな…常識であろう?」

血の鎖による拘束から抜け出した黒死牟が刀を振ると輪廻の両腕を斬り飛ばす。

「くっ!痛い…」

「さて…形成逆転だ…最後に何か…言い残す事は…あるか?」

輪廻の日輪刀を踏み折りながら黒死牟が質問する。

「言い残す事?ええ、あるわよ…言いたい事ならいっぱいあるわよ。でも一つだけ言うとなれば…」

「なんだ?言ってみろ」

言い残す事を決めた輪廻の様子を見て黒死牟が急かすように自分の体に突き刺さったままの殺された隊士の日輪刀を抜いて、その切っ先を突き付ける。

「……………ふう」

しばしの沈黙の後、覚悟を決めたように口を開いた。

「後方注意よ…腐れ六つ目野郎」

「なんだと?」

その言葉に後方を振り向くと直ぐにその言葉の意味を理解した。

「水の呼吸 肆の型 打ち潮!」

「花の呼吸 肆の型 紅花衣!」

頬に裂傷のある穴色髪の剣士と一对の翼が描かれた絵羽模様の羽織を羽織った蝶の髪飾りをした女性剣士が同時に技を放ち黒死牟の

頸を刎ねようとしていた。

「くっ！」

それを後方に跳ぶことで何とか回避するが完全に避けきれず頸を半分と右腕を斬られた。

「胡蝶。こいつは俺が相手する。お前は、その隊士の相手をしてやれ」

輪廻と女性剣士を守るように立った穴色髪の男性。鬼殺隊 水柱
鱗滝錆兔が黒死牟の前に立ちはだかる。

「分かったわ。任せて」

一方の胡蝶と呼ばれた絵羽模様の羽織を羽織った女性剣士。鬼殺隊 花柱 胡蝶カナエは、輪廻の近くで腰を落とす。

「さて：お久しぶりですね。輪さん」

「あはは：久しぶりカナエちゃん。もしかして怒ってる？」

「どう思いますか？」

「あ、あははははははは：そうねえ」

カナエの言葉に輪廻は引き攣った笑みを浮かべて曖昧な返答を返した。